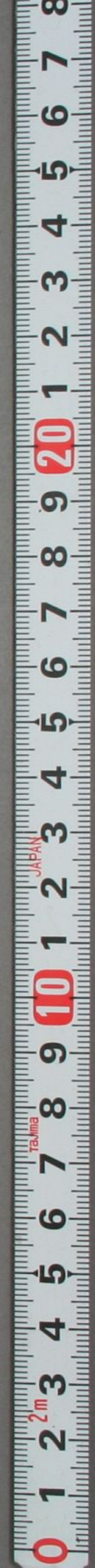


日間瑣錄

七

大正十四年九月上浣起筆

特別
14
1919
375



日間瑣録七
大正十四年九月三日起筆



176643
○九月一日三年前の此の大震災あり國災紀念の會
恰も二百十日に丁々朝来風あり幸に吾がかくも三年
前大震災の時を著早大の幹部大隈令彼に令名
中よりしが故に此年の七月今日の特に大隈令彼に
令して國災を紀念しけり今年七月八月赤日海印刷
の幹部と朝来令彼に令し午後に至るまは令社
内の各方働多議を議す、底より此の悪日に悪事
件を此彼に議せざるを得ざるは、世に不景氣の
トニ處ニ沈んか、労働者多く世を待てる困りあり此



176643

日間項録七

大正十四年九月三日起筆

東京市牛込区
東五軒町三丁目
五市嶋謙吉

○九月一日三年前の此の大震災あり國災紀念の會
恰も二百十丁丁朝来凡多幸に云いかくも三年
前震災の時に予著早大の幹部大隈令彼に合
中多し故に此年の七月今日の特に大隈令彼に
令し國災を紀念し今年七月八月赤日海印刷
の幹部と朝来令彼に合し午後に至るまで令彼
内の功働争議を議す底予此の悪日に悪事

翠僊高會



大正七年二月撮影

時、高り不法の要求をりて、^國危地に入る者働者の
心事ハ解し難し、尤竟社外の団体ニ、^東既使さ
ん、攪乱を試んとす(母)

○九月一日の一寺ハ芝増上寺の賢主カ飛行機に搭
乗し高空を蓮華を散りて新式の供養を行
ひしところ、一山の僧徒之れを不可とす(母)あり
群議甚多、^此賢主之れを聴かざらん、先づ機源を
飛行機を帝都殊に被服廠の上を飛んじ事
畢す、所謂生あり易きこと、一山の群議止息
せざる事ハ即ち畢す、^近來の寺可觀多
○露田のニ飛行機日本に飛來一機吾要塞地
帯に入る着陸一機廣島に着す、其の要塞

地帯に入るこの故言か否、未詳る、吾陸軍電
命一機を解体し、要塞地帯を再飛せ
ざらん、^國も此高空の事とす、但此の法
果~~露~~露の感傷を言はんことを恐る、こよあり、
こんも先キ吾が朝の露多、二機ハ露露都に入る
成見、彼ん之款也を受け、一世之れを以て四交
の要津と一、^露露機を以て、亦彼ん之吾ん
對すると同様の事あるべく、^露露機を以て、
此幸に廣島着の一機、條機を女と、^露露機を以て、
澤に達し得るを以て吾ん之れを款也、^露露機を以て、
彼ん之れも、^露露機を以て、吾ん之れを款也、
則^露露機の日、^露露機を以て、吾ん之れを款也、
則^露露機の日、^露露機を以て、吾ん之れを款也、

とるやん、何んぞ誤りも托しぬ故意のるをしぬあ
かとちん、如斯ものスラーウ式なるも知る可らぬ、これ
七呎多の一橋とす、と謂ふ可し

○米國へヘンリー、フォードあり、自動車王と稱せらる
もとスカンデ子じやう米國は浪流し来る移民
る、自動車の大の用ひらるへきま著眼し一程
フォード式の車を心りするも、世界大戦の起し
其の大需用に接着、忽ち一二十億の
巨額を為すまある前年、軍縮合議のワ
シントン条約なきや、彼れは此の合議の結
果世界の度船の皆老う合戦に賭あて自
動車の利心材に充んと、真に痛快の憂

は、彼人の如き之んを賞するの力あり
也

址を掘ると種々埋存品の出ることもある。是れを
せん。なかま、散物、托しといふくのものも巧み
雁足せん、せんが、老古すを此等なる高價に賣る、
西洋人、古物、此の鷹物をつんじ、ゆつたもの
、追々研究の結果、鷹心と別つて、今もたあるの
、古物、油断、と、外へ、人、知、れ、た、り、ま
ま、と、来、た、い、つ、頃、か、ら、こ、ん、ら、さ、か、如、し、う、た、か、ら
え、か、今、も、巧、め、る、鷹、心、家、が、若、干、あ、る、と、い、ふ
○昔、ハ、地、主、司、と、神、あり、地、を、犯、せ、ば、四、刑、あり、と、信
せ、ん、土、地、を、教、す、結果、土、地、を、買、ふ、こ、と、か、行、い、
ん、と、ん、あ、句、合、ん、と、崇、め、た、か、崇、め、る、と、い、ふ、ハ、教、物、を
崇、め、る、こ、と、同、意、心、合、ん、ふ、こ、と、と、あ、つ、た、か、ま、ん、ハ、た、ん

多、い、が、赤、地、又、次、の、一、の、考、い、は、ま、あ、る、横、を、大、あ、寺
の、こ、と、な、つ、た、左、の、地、と、い、ふ、と、あ、る
弘法大師の廿五ヶ條の巻、先のは、し、め、た、あ
寺、の、う、を、云、つ、て、あ、り、と、考、か、先、の、(道、邊)の、御
寺、大、あ、寺、ハ、こ、ん、法、地、と、い、ふ、先、の、地、を、崇、め
て、建、立、せ、し、と、云、つ、て、あ、る
土、を、崇、め、る、こ、と、の、典、據、ハ、こ、こ、に、あ、る
○前掲のこゝに、犯土を恐るゝ不から禁土といふこ
と、お、こ、り、久、經、に、地、形、を、変、へ、る、故、に、堀、り、山、開、し、
あ、と、を、禁、止、し、た、か、ら、と、い、ふ、と、ん、ら、為、め、古、代、の、寺、々、な
ど、の、地、形、を、一、く、查、察、す、と、可、ら、無、理、な、地、形
、建、築、物、が、あ、つ、た、り、と、お、も、つ、た、考、の、考、か、ら

那源の品騰りへ特に採るべきものある事なり但し
 活論文章等以外史實にも正しき賤を又する事なき
 存心こそくハハ書。此批注の特色とも謂ふべき
 歟

九月五日記

○貞享二年の江戸廻を得た。これを稀靴のものと偽り
 賣の家花より四五の江戸廻がある貞享三年版の
 京都の廻の石印とあるけれども江戸の如無いのを
 偽り物と疑ひ入れば、序に家花の江戸廻と年
 代明と挙げると

- 元和江戸廻 元和疑ハしいよれば
版本もある
- 内曆江戸廻 復物也
- 天和江戸廻 天和三年版

一 貞享江戸廻 貞享二年版
 一 元禄江戸廻 元禄十五年版
吉原を賣大尾賣入
 一 延享江戸廻
 右の六種がある外に大政京都の女子の廻を三四不
 一とある

○昨今の濃原の不景氣は、坊々其故を職工を解雇
 の二場があり、まんが動機で職工が働かざりし所が
 王子子物紙其他不在三四の社がある、自分の印刷社
 は従来紛擾の歴史を持ち、いのを濟りしとみれば、
 先月の廿七日突然、銀値上げを以て職
 工代表二十名連署で要求を提出し、昨今の不景氣
 最も失業を恐る人故、はるる女時、方り、窮る大膽を

要求してあつた、其要求を容れざるを以て、會社ハつぶんを
を得ざるを以て、無法の要求があつた、其の原因ハ從
未徴起割増の爲め多くの収入のあつし印刷工殊に
輪轉工が、今此ハ徹夜を痛しむる爲め其の収入を減
したるか、勤換ひ、未化の職工が之れを利用して一紛擾
を生ぜしめんと業し、外部の関東労働同盟と名通
謀して無法の要求を起したるかある、吾等ハ早晩一
たむと彼等と闘はざるを得まいと覺悟を定めてみ
まらふ、輕率を慎みむる爲め、實ハ同業會社の結束が
成らざるに輕々しく觀ふことハ不利であるからである、
故に一方職工側と對し、利害を懇示して彼等の氣
鋒を挫くの策を取ると共、一方山の手印刷會社

の結束を協議した、提案代表の二十名を召集して
膝談し、四語せんをも、彼等ハ理詰めれば、過て強硬に
出来ぬが、故に彼等が各課長を度外に置目して勝手
要求を起したるを利用し、課長を分るる身、職工の暴
状を告げれば、課長ハ今此側で同情を定むるにせ
し、職工等の專横を懐つた、此の課長召集も彼等
の氣鋒を挫く一策であつた、今度の提案が如何なる時
候を得ず且つ要求が餘り過大であつたか、二場合
①内の不安を買つた、萬一要求容れざる解僱を以
てするハ身の置きを所不能するハ分り切つたことを以
て、故に彼等の内心ハ頗る不安があつた、澤山此域に
乗じ會社の優秀の職工ハ相場の増給を要求す

の他同社の親方大橋新夫らと後き日志せしめれば
し此の攻守同盟も實際に於てどうかと氣をいんば
乃ち吾社が一時工場閉鎖を為す時他の二社七つ
も念に閉鎖するにやんる疑ふべきを得るものなれば勿論
一社の工場を日全部閉鎖し居るに一部閉鎖する時
ハ其の社の仕事を引受け代つて為すと云ふは
ハ行かんばあらう併し紛擾今社の仕事を他の合
社に後援的に擔ある所なれば必起を期すべきハ
脈絡を有する職工が働くことを肯んばいふこと
あると云ふると其合社も一部閉鎖若くは全部閉鎖
を由義らうと云ふることから攻守同盟の實に
この如くを挙るむある事か實地に行らんばいふ

幸に之れと駭するまむに於てつ以て將來職工同盟
と對抗せんとするは是れ此の同盟が必要の所ある先
角々がハこんと云ふに元々うね受悟を三社に見れば
ハ他日の為の甚すまむある從來三社の内難儀に
出遇つた時印刷組合が援助を決議しつり此の如
七三三の決議をやつて後援をしてんばハ全部の印
刷業者を支配する組合の決議ハ何れも實地に效が
まむ富子も接し又にも有る不令社同者か日興
する方が有力なるもの本社ハ富子此方面に力を
注いば他の二社も利害の關係上田んくのも務ハ
吾社に防いまり對策も悉く至つたにんも從
来うのこともあは尚ほ職工を對抗上必要のこ

とか今一の別とある、是ハ何と云ふと定期刊行業
者が印刷所と後援を興ふことをめざす大抵職工の争
議の余地をなく定期刊行物の印刷切迫の切迫の
起ることを常としてゐる、今社ハ定期刊行物の得る
利益の割和を為す為め、胸臆をうやむやを得ぬ職
工のつけに、女時、その折あるは、各刊行業者より
競争上、さうく、雑誌の早着を要する、然し、各刊
業者が印刷会社と後援を興く、各刊行者間、申合を
為し、一雑誌の印刷不難か、おこりさうな、為の遅
滞する時、他の雑誌も、義理今日、罷人之印
刷が終つても、若くは送を延ばすことをさうせば、自然
幾久七の争を此様、今、起ると、目標を失ふこと

さう、印刷上ハ此後援の為め、割和する必要さうな
つて、強硬の態度に出で得ることさうな、ひある、施
行者は、松も印刷不の敷、取りも直さず、印刷
價を高め、結果、雑誌の價も及ぼさず、印刷
工ん、ハ、さうな、後援の利益上、印刷不と後援
と為す、さうな、自然の關係がある、今、各社の紛擾
ハ、檢も主婦の友、印刷の真最中、起つた、他の
婦人雑誌同志の間、復申合を必要とす、此、さうな
各社の重役は、婦人雑誌の発行者は、さうな、紛擾
義、ハ、争先、さうな、紛擾、さうな、同業、さうな、主婦
友社、さうな、献まで、關係者を集合し、此、女時、既に
各社の事件、解決を見比、然、さうな、他の、さうな

前陳の如き後援の申合を為し得たのを幸かあ
つた、隆徳社を利害が関係がある且つ印刷所と職
工とのアブナイ関係を充分諒解せざるものもある、そ
れを對し、充分實際を諒解せしめることを得たのも
亦君社の今回の事件の副産物と云ふてもよろしい、

九月六日記

今回の事い幸々興々を得たんど、亦何時どの社も工
ニテ事か起らぬに限らぬ、十一月のあた時機
ハ起るべき氣配即ちあるから、亦戒を要する、
内部の不満足も起るとあるハ防ぎ扱もあるが
外部も現存是に煽起するのだから、甚し危険
がある、印刷労働の理想とする所ハ、会社の

又理権をも得んとするのがある、是と云ふ意に類す
ることではあるが、西洋の其の型のあることではあるから、ソ
ノわり油断が出来ぬ、職工に對し措置を誤つれば所
てハ追々愛記権も上り上げていんとし、ある程度
既にあるのみある、協又彼もハ兎角今社側の威嚇
が、職工にいとも横暴を極め、今社に現に、階級
階級の秩序不甲斐ない状態におるハ、事定むある、
今社に弱く出んハ、こまかきつけ上つて来たもの、何
んといつても資本側といつて結末かつ、ぬれぬとる、
ハ弱味に寧ろ今社側にある、彼等職工毒化固
体、多くあるもの、血氣が、無責任に新まり子
痛快のことを好んでゐる、是れ、他の職工と異つて

○今日神田の出版と漁り一折の世界圖を贈る標
誌：

環海航路新圖

とあり、文久二年甲斐市川の醫術河廣瀬保彦
の上木ちる所のよゝ紙尾の署に依るもの也。著者
保彦ハ安政七年正月日本遣米使節に隨行して
合衆國に到りしもの也。正月十八日都下鐵砲海
軍我軍艦操練所より舟に乗り品川に到り米

四軍艦ホウパタン羅に乗移り廿二日横濱を出發
してから九月廿九日我軍艦操練所へ到着すまゝの行
程を圖に細記し且其日の行進を録して其の公此の圖の
特色は、圖面の幅より其の旅行の長さを知れんべ
し。此頃の舟の汽船の速力も屋々たるものか、サンフラン
シスコよりパナマまで十八日を要してゐる、毎日の行
程は約二百里内にある。喜望峯を廻つての旅行
である(亦)をる(過)してゐる。高(大)合衆國に既、數
度とんておれ城(海)路七回とんてゐる、これ七回
の一特色也。今(一)十年前の亞米利加の城(海)路の
秋子もこの、今日の程の如く敷設してゐるものと
對照すると、誠、天壤の差がある。此の

國の凡例：橋を徑奇我邦に出放さん此世界國
 を行ふに不也あると云ふてある、若者「航路日記
 三卷を上梓する若くは刻の由きあることを吹
 聴してあるか、是れ果して放さうたりとうか、知ん
 る、先々角由の國ハ六十年前洋行の状態を
 知るハ一の好資料ハあり、此我使節の一紀念物
 と云ふことが出来、若者房の漱保虎のことハこん
 道録りせよ、此ハことか多うか、此の國を得た場合
 と謂へて見たいと思ふ。

九月廿六日記

○例の爾來、余の山陽評の才三四か本月の東洋文化
 紀のなる、不相交野卑なる筆ハ不快を感せ
 しある、他山の石採へば所也あるから爰に存しおと

十二行

に仕へ遂に新田郡に土着したのであらう。其中の一人が高山遠江守の先祖である。私は久しく上州に
 居たが、彼地には今も尚ほ高山を名乗る者と高山を名乗る者が入交つて居る。高山を名乗る者は桓
 武帝から出た平氏で、高山を名乗る者は弘文帝から出た伴氏であると云ふ事は、前にも申述べた通り
 である。彦九郎先生は伴氏と定紋を同じくし、更に替紋をも同じくして居るから、伴氏と同じ血統に
 属するものとの推測は、満更荒唐無稽でもあるまい。唯先生の氏名が大隅の高山城から導かれたもの
 なら、高山と讀む可きであるのに高山と讀んで居るのが解らない（追記……又聞ではあるが、先年國
 學院大學に彦九郎の曾孫高山某が居た。某が云ふには我姓は元來カウ山であるが。世間では誤傳へて
 タカ山と呼んで居るのだと云つた）

○肝付中將が或る時「俺は高山彦九郎の親類筋だよ」と云つたと云ふ事を或人から聞いた。私は其理
 由を聞かざうと思つて居るうちに中將は物故して了つた。残念な事をした。

大正元年十一月肝屬兼重公贈位奉告祭。謹賦七絶一首遙供靈前。

隻手障江功豈空。聖恩今日表孤忠。英靈如在城頭樹。蒼鬱撐天吼北風。

氷原鉦齋

高山彦九郎の先祖

六九

國の凡例：橋を從前我邦に出放さん此世界國
を行平に不也あると云ふてある、著者「航路日記

隨筆賴山陽に就て(三)

後藤肅堂

〇ちよいと前號分訂正

(十一) 惡材料の復活七〇頁の終りに

山陽の葬式帳に川上儀左衛門の名が乗つて居らんと云つたのは飛んだ記憶違ひにして、誠は外宿門人中(松平越前守家來)と肩書して出て居つた。飛んだ間違ひでは在つたが、これは自分の前論を裏切らんのみではなく、却て有力な裏書を與ふるものである。乃ち彼は奮然として出て行つた師弟の縁の切れた他人でなく、葬式當時門人と大人しく名乗つて棺のお供をしたものであつた。此一事は著者記述のロマンスを根柢から破壊するに足りる。猶此男は、天保九年五月刊の平安人物誌儒家四十人の内に、

字君璋 號東山
十丈坊辻子一條

川上儀左衛門

として載つて居る(外に山陽門出身者としては牧善助號百峯字信候が出て居る。次の嘉永五年のものには宮原謙藏節庵も出て来る)川上と云ふ男の何であるかは知らんが、兎に角山陽門下の人として京師に帷を下して居つたと云ふだけは確かである。モ一つ前の十八號の方に、山陽廢嫡後春水の養子になつたのを杏坪の子としたのも誤り、これは春風の子である。右以外に誤りはなし。

十二 學界の禮式

なほお断りして置く。これはまだ本書批評の本文ではなくて、本文批評に入る前の小手調べのつゞきである。つまり「山陽の弱點や闇黒面が追々わかり、傾倒の念が全くなつてしまつた。」と云ふエライ見識の先生に、山陽知識がどの位あるかを測定する偵察戦である。たゞそれ偵察戦である、何時までもからかつて居るには及ばん。どこまで行くか分らんが、ページが盡きる所を打切とし、次號本論に入る。

本書材料の取扱ひ上「惡材料の復活」に就ては略々前號に之を盡した。材料取扱方に就ても今少し云つて見たいが、先きを急ぐからそれはお預りとし、こゝにたゞ一つだけ云ひたい事がある。

本書が多くの新しい資料を提示してくれた事は、我れ、後學の甚しく感謝する所であるが、それと共に本書の著者も又前人に得た資料の出所に就て、感謝の意を拂はたい事である。

先づ他の例より申すと、山陽が茶山塾から恩人築山奉盈に贈つた例の長文の書狀がある。今では誰も

國の凡例：橋を從前我邦に出放さんれ世界國
を江戸にわさるといふてるも、昔あるに
るに

知る普遍の材料ではあるが、それを始めて世に提供してくれたのは、吉村春雄編明治十年出版の「山陽外傳」である。山陽の出発点として尤も貴重な此文書を世に紹介するまでの、編者の苦心は一通りでない。左れば「家庭の頼山陽」も、「頼山陽大觀」も之を收むるに當り、其出所を明記して居る。これが文壇の禮である學界の徳義である。

本書に収録して居る山陽が大鹽平八郎の尾張に之を送るの序。それは如何にも著者の云はるゝ如く、從來世にあるものは〇〇澤山で、殆ど意味の通せぬものであつた。若しありのまゝ出したら恐らく宮武外骨君の筆禍史中のものであつたらん。

此書に全文の出で居る完全のものが發見せらるゝには、又それ相當の苦心もあつた。井上哲次郎博士が「陽明學派之哲學」を著述する時、是非その全文を見たいと色々苦心した末、やうく伊勢の屋代弘訓の家でそれを發見し、こゝに於て完形となつた。此點に於て井上氏の功は歿す可らざるものがあつた。幸田成友氏の先年「大鹽平八郎」を著すや、亦此文を擧げ、其出所を明記して在るのは、學者の徳義として然るべきであらう。

此書の此文を記する、敢て自家發見とは云はないにしても、前人の苦心に對して一言の挨拶をもしないのは、不徳義と云ふほどではないにしても、自家で新資料の搜索に苦辛した覺えのある著者としては、あつたに思ひやりのない行き方であらねばならぬと思ふ。これはたゞその一例であるが、學界には自然學界の禮式がある事だけは御承知を願ひたい。

十三 化け物屋敷

本書缺點の第一に擧ぐべきは、劇中に出て來るワキ師の身元に就て全く不注意な點に在る。云ひ換れば人物關係を丸くお構ひないので、話の行先が分らなくなる。ソラ喧嘩と云つた所で、相手が青龍刀を振り舞す鬨羽か、將た膝栗毛の彌次さんかでは觀察點が違ふ。蘇峯先生が題して「マヌリンのミルトル傳」に就て、人或は其書を評し、苟も彼と五分間接觸したるものは、必ず著者の筆端に上るを免るゝ能はずと云へるを引て賞揚されたる坂本箕山君の「頼山陽大觀」の如き、成績は必ずしも云はず、用意の點に於て感謝すべきものがある。

本書著者の此點に全く盲目なりしは、折角の材料提示を無効ならしむる。一番肝心な山陽長男にして、廣島本家の當主たる餘一（聿庵）に就ての無了解は、前すでに之を云つたが、その弟の三樹三郎の身の上に就ても同じやうな向ふ見ず話がある。

(一四)「三樹三郎に就て」の文中、彼が出府聖堂に入る時の事を記して「山陽の叔母に當る人が尾藤二洲に嫁して居るが、二洲は當時三博士の一人として聖堂を預つて居た關係上、三樹三郎も聖堂に學んだ(六七頁)なるほどそんな噂も昔話に聽た事があるようだが、何しろ二洲先生の死んだのは文化

國の凡例：橋を從前我邦に出放さん此世界國
を江戸に下りてあるところにてある、昔あるに
あるに

十年父山陽が四十九歳の時、三樹君御誕生前十三年の事だから、アラ怨めしやの幽的ならイヤ知らず、生きた二洲先生が聖堂を預らふ筈もなく又、そこへ三樹君厄介になる次第にも参らん。年表の方にはチャンと六十九で死んだまでが出て居る。土臺年表が借り物だけに全く没交渉なものには困る。苟も山陽を論ずるには尤も因縁の深い二洲先生の生死位は知つてほしう。モ少し面白いボンチ繪がある。

(四)ノ一、山陽と茶山頂中。「菊地五山が入門の折其親から茶山に寄せた書狀に、山陽が茶山に代つて先方から来た書狀の餘白に返事を書たのが傳つて居る。先方からは誠に貧窮で兒をお頼みするに束脩もあげかねる亦袴もない位で汗顔の極であるが、それでも入塾が叶ひませうかと云つた風な手紙に對し、山陽代筆返事大要、それでよろしい、すぐおよこさない(三六二頁)五山は山陽の「論詩絶句」十二絶に「學吟爭顧五山知。寸舌權衡海内詩。」とある如く、當年日本詩壇の専制的大君主であつた。所が彼は明和五年の生れで山陽より十一歳の年上、茶山の所に居つた山陽三十歳の時は、五山四十一歳になる。四十一歳の茶目坊が束脩も持たず袴なしの寺子屋入りとは、あまり奇抜な珍話で、さしづめ一平君を煩すべきものである。因に申す五山は今の菊地寛君の祖父がモ一代前の大祖父かに當る。文壇の逸話として此圖を寛君に呈したい。

(二) 山陽の文藝その一、日本外史の項中。白河樂翁公がそれを求めた事を記して「當時の宰相白河樂翁公」とある(一四〇頁)少々變だと思つて讀んで行くと又「幕府の宰相(樂翁公の事)が推賞して措かなかつたと繰り返し(二四七頁)樂翁公を時の宰相とした結果、外史の樂翁公獻上を「其著日本外史は官府の採納を得た(四五七頁)とまで發展して來た。自分の持てる普通有りふれた安つばい歴史に依ると、樂翁公が幕府の宰相を去つたのは、高山彦九郎の死んだと同じ年の天明五年、山陽六歳の時である。それが四十年の後「當時の宰相」又「官府の採納」となるには、御殿場の隱居さんでも拾ひ上げてくれたのか。事ここに至ると前號に云つた「髻亂式」で十五歳の赤ん坊が呱呱(おぎあく)と啼き出す位は朝飯前の仕事である。舞臺は丸で化け物屋敷だ。

十四 人物關係

モ少し直接な對人關係のお話を一つ申そふ。

(九) 大患不起の消息に、菅徵卿宛書狀を紹介された事を感謝す。これは眞の感謝である。兼て知りたふと思つて知るを得なんだ新史料を此に得たのを心から感謝します。所が其次に「此手紙の宛名徵卿とあるは備中の人で、山陽の生前懇意にしてゐたものだといふ。犬養

國の凡例：橋を從前我邦に出放さん此世界國
を河原にわさるとそおてるも、昔のいえりる日也

木堂君から此人の事に就て聞た事もあるが、遺憾ながら忘れた(三六頁)とある。時めく遞信大臣(これこそ當時の大臣)を友人に持つ事を吹聴する機会としては、好都合であつたが「忘れた」では何にもならん。モ一つ「山陽の生前懇意にしてみたもの」も面白いネ。「死後の懇意」と云ふのに分つ必要があるものでしやうか。

所が宛名の微卿が分らんと此手紙の効力は皆無になる。それが分らんから先生折角噛んで含めるやうに解釋して下さつた理窟が、見當違ひになる。

犬養大臣を煩すまでもなく、苟くも山陽を知るものは微卿を知らん筈はない。文化十一年山陽初度歸省の上京途中(三十五歳)

發_レ柄菅微卿諸人送至仙醉山而分(五律)

の作がある。しかしこれだけでは關係は分らんが「手紙の頼山陽」の八に「發程も明後日」と題する菅良平宛の手紙がある。良平の微卿である事は誰も知る所、此手紙は茶山塾を去らんとして四方楚歌の中に、只一つの助け舟たる微卿に、出發日を知らした物にして、以て懇意の程度が知らるゝ、これほどの古い懇意である上に、此人醫者である事を知つて讀むと、此手紙が生きて来る。病狀を詳悉して猶足らず、考_レ主_レまで加へて説明し、そして「御考_レ下」とある。此の御考可被下が此手紙の要件である。つちの醫者もあんなり當てにならん、考_レの考を承りたいと云ふのが、此手紙を書いた理由である。その對人關係がお分りにならんから「本文は自己の血症を報じたものでなご、閑文字扱ひにして居る過誤を生じて来る。序だから此手紙に就ての大見當違ひを訂正して置く、書狀尙々書に、

當春より中村の保命酒に焼酎をませ午前_〇にたへ候_〇せ付候、とある短文中。著者は三つまで間違つた器用な誤釋をして居る。曰く、

更に尙々書きに於ても病中の風采が明かに描かれて居る。大酒家の山陽も今はなか／＼當年の如くではないが、酒も全くそれを絶つ能はず、保命酒と云ふが如き甘い酒に焼酎を交せて少しづつやつては居るが云々。病ひを得ても酒とは因縁を切り難かつたものと見へる。(三八頁)

いくら間違ふにしても、これほど鈴生りの間違ひは天の窟戸以來あまり多くはない。(一)當春よりの文字を見落したので、これを病中と見たのである。發病は六月十二日乃ち晩夏である。山陽先生行狀にも「自始病_レ禁_レ酒不_レ飲」と斷つて在る上、此手紙の右の文のすぐつゞきにも「只酒不_レ飲煙草不_レ吸、粥計三度宛」とある。此當春より云々の尙々書は、當春よりこんな事をもやつた、それも病因ではなからふかと、診斷を受ける容體書として提出したもので、現狀罪惡陳述ではない。

國の凡例：橋を從前我邦に出版せんれ世界國
をテテリルにわさあるとそふてらるる、昔ある、えりる日也

(二) 保命酒を甘い酒と見たのも、一つの間違ひの元になる。「言海に保命酒、備後の鞆津にて製出、味淋に似て芳烈。」とある。文彦先生なかく話せる、芳烈の二字註し得て妙、甘くはあるがアルコール分は相當よひ。これだけでも可なり人を酔はす力のあるのに、アルコール分の非常に多い焼酎を四割ませるのだから、決して弱い酒ではない。それに肝心な

(三) 午前をすつとり落したから、丸で相場が狂つて来る。當春乃ち無病息災の時分、晩酌は例の如くやる以外、午前中に可なりアルコール分の強ひやつを使用した。

「これが悪るかつたでしようかネ」と云ふ質問なり。これだけの間違から来る結果が

(四) 病を得ても酒と因縁を絶つ能はず。」と云ふ飛でもない大間違ひを、集大成することゝなつたモ一つ申すと最後に

再逢不可期。縦令逢。不能如昔日。轟飲可恨(三六頁)

とあるを評して「更に最後の漢文體の一節は實に涙を催させる、平素弱い音を吐かぬ大酒豪の此らから此言を聞くに於て、益々悲痛の響きを傳へる(三八頁)とある。感情は人ごとに違ふから止むを得んが、實は此一行の文章は、瀕死枕頭猶綽々として除裕ある彼の襟懷を観るべき、(著者の評とは正反對な)好資料でなければならぬ。一體妙な所で句讀が切つて在るから、意味が分らなくなるので

十五 女の頭へベタリ

對人關係をモ一つ。

一體品性の下劣な人は、他人の場合にも男と女とが居れば、すぐ悪る推して臭く解釋したがる。これは下劣な自己品性を以て他を推すからであるが、著者の如き山陽の闇黒面を知つて全く傾倒の念を去つたと云はるゝほどに、上等優越な品性を持つ紳士に、そんな悪る推は斷じて無いと云ふ保證を付けた上で。

A 扱て細香女史と山陽との關係。

B 玉濫女史の末路。

の二つを讀んで疑ひを生ぜざるを得ない。從來(頼山陽大觀著者を除く以外)山陽と細香とを奇麗な師弟關係として居るのに對し、著者が十頁を費して醜關係を結ばせんと縦説横説した結果や如何。たゞ讀者に嫌やな感情を與へる以外に、少しも著者努力をうなづかせる理由が出て來ないのを遺憾とす。日本が持つ女らしき詩人のたゞ一人として、才色双絶且つ一生男を知らなんだ閨秀細香の顔へベタリと泥を塗らふと勉めらるゝ熱心さには驚くが、それを一々批評して行くには、原文の十頁に對して二十頁を要するゆゑ、こゝに其場面を持たぬを以て止むなく略するとし、たゞ著者がかゝる場合、これ

ほどの親切心を持ってペンを執るかを檢した、後の場合の玉蓋の方に就て一考すべし、玉蓋と山陽との關係は此に問題とせず。たゞ此書に提示し、そして著者が無無件にそれを承認した、「文人の歌妓店をひき申候。」とあるだけに就て云ふ

詩人としての細香の如く、畫人としての玉蓋も又才色双絶女らしき、しかも氣魂筆力ある畫人として、且つ終生を無垢潔白で送つた事に於て有口である彼女を、出所不定なるたゞ一本の鐵砲手紙で、これ又ベタリをさめ込まんとするは、何たる無情ぞ。

人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を斬る流義に、女とさへ見ればベタリと其顔に泥を塗る事の流行る物騒な世の中よ。

知りたいのは此の可憐な女畫師へ泥を塗るに就て、著者の取つた研究程度の淺深如何にある。著者は云ふ。

此の女は備前尾の道の産で其姓を詳にしないが、名は豊というた(五〇七頁)とある。これほど有名な女がどうして姓が分らんでしよふ。

竹田莊師友畫録六人目に玉蓋平田氏とあり。杏坪の春草詩抄には、平田氏古鏡歌と云ふ長篇が載つて居る。しかも近年鷗外博士の伊澤蘭軒と、重田博士の頼杏坪傳とで組上に載せられ、今猶世の記憶に新たなる印象が付與されて居る。それがどうして姓不詳と斷るほど朦朧であらふか。書畫屋仲間を知

らす、學界に於ける玉蓋の今日は、餘ほど周密なまで研究が届ひて居る。今さら姓詳ならずなど云へた義理のものではなう。

著者は出所不定な第三者同志の手紙を一通持ち出し、「その消息は左の一通で窺ふ事が出来る」と平氣で澄まして居らるゝが、此のフザケ切つた輕薄極まる一通の手紙に、人を生殺するに足るれほど權威があらふか?

此の有名な(畫人としてよりは文界方面に)女畫人の姓すら出て來んほどの不用意で、人一人を殺そうとは何たる冷酷ぞ、何たる殘忍ぞ。

その冷酷、殘忍が十頁の細香播磨となつて顯はれたとすれば、執念の恐ろしさに戰慄せざるを得なく、因に申す。玉蓋に對する此の手紙の信するに足らざる事は、

(一) 此の手紙の年月と、

(二) 山陽遺稿補遺にある、

爲ニ女玉蓋ニ題ニ其所ニ弄古鏡ニの

詩の年月とを對照一考されたら、思ひ半ばに過ぐるものあらん。

隨筆頼山陽に就て

六種の回文、次る今居るし敵者の

也
○九月八日 此の左の教程の圖を繪し附録を

一 豆州熱海道祀迎 一冊

此者卷尾に元禄八年乙亥八月五日
於豆州熱海道梓之とあり熱海の
由来の記しをも存するものなり
まの也熱海といふかおちろく、まゐ
しとハ版式長に精也、道志と云
んらうしと熱海縁地、此書徳大郎
かをよむるハ此頃の風を、地圖を
すまゝ大体今よりそとあつた
く開けしと見え、つ、地志(道志)也

と所持し熱海の地名、震木のなを、此の
書中の地圖を複製し、國語の、此の
夜木(註)に、客三、其の、此の、とあり、
しと、價十五円也

一 八都府籍隠里 一冊

元文五年刻す、その古原細見
也元文の重保に、次の年の強よ、此
次の細見の、な、す、もの、長、稀、此、
す、く、卷首に見る、し、潤、房、の、圖、あ
り、此、地、と、杯、無、を、ら、う、ん、な、る、圖、あ、る、者
初志、見、志、待、志、契、志、根、志、別、志
六種、の、圖、あ、る、次、に、今、居、る、し、解、名、の

享保頃江戸芝居

たばこうりせりふ

忠七たばこのせりふ

▲勝保録吉郎出品▼

元祿以前煙管

同 雁首

右雁首にて Tobacco の文字を作

りて出品

真鍮製煙草入根付火皿兼用 卅一個

黒革製明治初年製煙草入 一個

地球儀人力車馬車、蒸氣車洋傘文明開化

記したる旗其他當時流行物打出模様

煙草入金物

汽船(帆船)にして外輪汽船、寫真攝影技

師視暗相圖、關羽像、紅毛人

煙草入金物紅毛人

菅蒲草製煙草入金物時計形 一個

トバコ、其歴史並關係記録 一冊

千八百七十八年刊フエールホルト著

東廬子卷二喫煙の圖あり

▲淺田澁橋出品▼

金唐革卷冊草入根付鐵に金象

眼蜂、緒締、ンボ金具翡翠 一個

樺皮製卷煙草入根付鹿角古錢

形緒、樺皮製 一個

古煙管 二本

白檀製卷煙草吸口、鐵裁百合

花の彫刻 一本

鶴脛製卷煙草吸口 一本

同 並サビタ製吸口 各一本

▲上羽貞幸出品▼

煙管形根付 一個

雁首吸口真鍮製半銅長一寸九分太直徑六分

五厘

太鼓形煙草入 一個

鐵製小判形燈器 一個

懷中用燧鎌信濃國 一個

傾城張見世煙草盆 一個

神田孤耕編日本煙草生産論 一冊

▲貫井青貨堂出品▼

煙葉、雁首 吸口 九個

▲大島富士太郎出品▼

蒙古火打袋 一個

たばこうりせりふ

「もうすもおろかこのあきんど、江戸ぢううりつけの上々たばこ、十もんめでゆみや八文かけねなし、まづおつとつてはおとし玉、ちつといたらうがそでひちて、むすびし水のこぼれるをはるたつけふの風になびく、ふじのけむりの一二ふく、きはれては風しんでんのかをりをふくみ、氷きへてはなみきうたいのひげよりは、こまかにきざんであげるなり、あぶらひかすの御□□したにあたらすやわ／＼と、にほひはしやんとしなる、あさまがだけにたつけふり、これをげんことなづけたり、みなねんぎよくの女中れい、よねしゆよねざわよねたちの、はつとりなりのうつくしく、ふうもよしのゝはごしらへ、つもりつもつてこいのやに、たばこのやにのやにくさく、やになあおらづれに、ござる女中は有まいが、せめてたばこをかいのくに、こうしう小松のにはひたばこもござんます、ござんますござんすもしひよつとたばこにおよいなされたらなまみそなんどもござんます、そのほかしよこくのめいたばこ、たかさきよし川こくぶんじ、大のし小のしみとのあかつちた

てたかやす、するがにみを、ひろくのたばこ、すゑひろあふぎおつとつて、とくわかたばこにごまんざい、このげんぢうなんども、わしらがたばこをかわねばならぬ五匁めせば五千ねん、十もんめでは一まんねん、とうぼうさくがたばこぼん、うらしま太郎がさせるつ、三うらの大助ひやくむつくりとのみのよい、ごく上たばこのやんやすうり、らうにやくなんよのなぐさみぐさ、いのちをのぶるくすりて、ちやうめいくさとも申なり、さしてじまんじやあらねどもわれらがたばこひとひねり、女中にすわせ奉れば、いけうくんじて花もふり、しやかもだるまもうちやうてん天ねんみめうの御たばこ、てんと天下にかくれなき、天からふつたやすうりと、ぶてうほうげたうちたゞき、てんでつとんとつてんでん、天もひゞけどうやまつて、たばこ十匁で八文(□はやおれにて不明) 若樹寫寄

短冊もくるく舞のせわしなく
なるほど涼し軒の風鈴 鶯笹啼

跋

五峰先生非詩人也而其詩雄渾高華不愧古作家洵
足以傳矣古之詩人從李杜韓白至歐蘇諸家其志節
卓異事功正大縱令無詩其人自千古矣五峯夙抱經
世志練達事務參畫大政數十年忠孝惻坦之心憂世
傷時之思一發之於詩與彼笑傲風月抽黃聯白自命
曰詩人者復異其撰老杜有言餘事作詩人五峯詩蓋
亦餘事噫是所以足追蹤古作家而傳于後也歟
大正乙丑初秋於五泉
歌川絢之拜跋

十二行

○已般秋の旅行の折頼三樹の相席に於て二詩を
吟しが今又秋の友人より左の二詩を寄る

自加茂刊つ前舟中記

鴨屋

野村之下借仙棧 硝碧亭古出波潮 崖樹

陰冥老葉睡 洋風空濶大濤駭

窟用蚊殿星無底 石卷龍身天有橋 男子

一搜雄麻冷 松浦姓受鳥妖境

○富山の中西民報 五六枚到達して投じたと

余の隨筆山陽の評が四回連続してあるが皆な

可なりとの長文である、二十一回掲載して遠く

あるが出版部、七回し、新書と富山三書其書

校教授吉田貞一から寄ると来るといふから評

者、此人のありと知れ、評の文、長いが、才二面以下、互
 接余の著を評し、いさゝか余の著を誤人が、揚句
 自家の不徳を陳べ、おろのひあるか、左、余の著
 後、係ある部、今、之を収めおろ。
 ○大町桂月、と生前、遂に交、つ、様、合、が、興、つ、比、か、
 才、お、酒、客、び、文、家、あ、つ、比、晩、年、秋、四、萬、温、島
 起、臥、し、明、仙、骨、も、終、こ、同、家、び、没、し、比、の、自、分
 八、過、般、秋、用、流、行、し、比、あ、し、前、の、こ、と、あ、つ、比、此、頃
 香、典、さ、し、比、心、の、二、冊、の、寸、珍、本、桂、月、が、萬、温
 島、さ、り、し、比、さ、り、つ、ん、く、を、勉、め、ん、と、我、書、や、れ
 歌、狂、詩、の、類、を、録、し、比、さ、を、復、れ、と、い、ひ、冬
 籠、帖、萬、温、島、帖、と、標、題、が、附、ら、ま、る、余、の、小、稿

十二行

理庄 木長 二十一日の福田村會大紛擾

兒島郡福田村にては二十一日午前
 十時より村役場會議室に於いて村
 會開會出席議員十六名(一名缺)先
 づ村長淺野辨次郎氏議長席に着き
 村政上に於ける意見を述べ日程に
 入らんとするや片山議員は日程前
 に道路問題について質問し議長是
 れに答ふるも議員満足せず次い
 て山本議員反呼を求め起立
 議長は過般の村會に於て閉會後
 署名委員を指名せるは如何なる
 理由なりや會議則を無視せるか
 と突き込む、淺野議長會議則を無
 視せざるも忘却して居たと無責任
 なる應答をなし山本議員續いて責
 任ある答辯を迫り今後は期してか
 らる失態なからん事を注意せるに
 村長淺野辨次郎氏は是れに對し諸
 君に於いて了解出来ざれば監督官
 廳の處分を受くと言ひ議場は緊張
 し議員極度の激昂然として起り議
 員数名は一時に起立議長に肉迫せ
 んとしたるも結局田中定次氏反呼
 を求め
 只今村長淺野君の答辯は甚だ不
 都合極まるものがある我々議員
 を侮辱し會議則を無視したるも

聯合協議會

村由田橋平治、會敷町杉原富盛
 早島町林敏造、庄村秋山輝治、倉
 敷町兒島岩太郎
 道路下水調査員
 會敷町道路計畫調査並に下水道計
 畫調査委員聯合協議會は二十一
 日午前九時から新築園遊會堂にお
 いて開會出席者十二名(一名缺)應
 園遊會長、園遊會助役席し先づ道
 路及下水計畫本年度追加費算額二
 千六百七十七圓五十二錢の諮問を可
 決し町道開闢案議決案も可
 決し十一時半閉會し一同は會敷小
 學校旭町校舎道路敷設に伴ふ校庭
 一部の地均しの整理に就いて實地
 視察を行つた

園藝會總會

郡園藝會總會は二十二日正午より
 郡會場にて開會、午前中の理事會
 提出案による大正十三年度經費收
 入決算報告承認、兩備七郡聯合果
 物品評會出品實地指導講習會開
 催調査の件補助の件等を原案可決
 し閉會した

牛馬商組合總會

倉敷高女 會敷高等女學校
 二十五日午前九時から同校講
 堂において同窓會を開催、講師に
 會敷中央病院婦人科部長本田繁
 博士を聘し講話を聴き餘興に手品
 奇術等を行つた
 小學校男子部 會敷小學
 校男子部同窓會は二十五日午前八
 時から女子部にて二十六日午前九時
 からいづれも旭町校舎講堂におい
 て開會本由田橋氏の趣味講話餘興
 等がある
 町總代當番會 會敷町
 役場では二十四日午後七時から新
 築園遊會堂に町總代當番の會合
 を求め盆佛送り施行に就いて協議
 をなす、當日は町衛生組合委員も
 列席の筈
 證書交附 元濟音小學校訓
 導片山秀正氏に一時恩給金六百十
 七圓、故三須小學校訓導小倉枝妻
 小倉滋兒に一時扶助料金四百三十
 三圓故會敷小學校訓導三島安太郎
 妻三島玉野に一時扶助料金二百六
 圓各支給證書は二十一日郡會場由
 交付された

本林道は本年三月二十八日より
 測に着手し更に四月二十五日より
 實測に取掛り五月二十一日應十
 工に着手八月十九日完成工事監
 督として會敷林道技手其の間に
 當り線より終點迄の延長は一千
 六百間にして内一千二百間は自動
 車を交通せしむる爲め幅員を九尺
 乃至十二尺とし諸君の便利を圖
 り爾餘園遊會林に達し更に隣村皆部
 村大字河口に連する間は幅員を七
 尺乃至九尺として木村の橋出と人
 馬の往來に便にしたり經費は國の
 負擔に屬するもの七千圓町の負擔
 に屬するもの八百圓部の負擔八
 百圓にして之に要せし日数は一百
 日なり此の間町民は當局の同情あ
 る此の救濟事業に殊に非常に感激
 して在郷軍人會青年團員は勿論少
 年赤十字團員に至る迄それ、二
 日乃至三日の歩をなして社、奉
 仕を試み其の他一般關係部落民も
 相當歩をなして此の事業を助け
 附、國民協力して成功を見るに至
 りたるものなり
 夏季綜合講習
 上房郡有漢教員養成所の夏季綜合

畜乳組合

創立總會
 かねて會敷町日下三百吉早島町寺
 山庄次郎、會敷町大熊、牛馬商組合
 のもとに同業者を以て設立計畫中
 の備南畜乳組合は今回郡内同業者
 十名の賛成を得いよいよ設立され

理の役人の減つてゐるから、一刻も合はぬから、
荒かまの由来印刷向いある物に頼りては亦價も
七甚しく廉か、是れを爲め、民業の壓迫を憂ひ、
或る物の馬鹿にちりいひ、民間の事業、友省の
業、是れに交渉ある所、無用の支拂を由義を
不任向を極めをぬる。

○余が小物廬之友五峯の名を撰ぶ所、戚家直房
信城廬記を化し、載せしむ。茲村の稿に在り、信城跋
す。後刊しん知人の領り、此記余の経歴の事、而も
叙す。余の自傳に揮毫を要する事、五峯亦余
の爲め記を心する約あり。果さずし折々、跋後其の
遺言を檢する。記の字、稿一編を得たり、但し未

定の稿に属し、生前余に示せりしもの也。余此記
の成り初と云ふと、七りしを遺稿とす。彼森袖海、
嗚し、班黄を施せしめ、之れを遺稿に加へしめんとす。
袖海の班黄を施せしめ、青島五峯、思構を要す。
さうし、唯此未跋四五行加ふ所あり、余の言に合
せず、再訂を求めし日較り可きを免ふ、其文左の如し

市崎春城卜居江戸川之南、築池連の岸、有園池
勝、獨愛向陽之一室、机案卷冊、與燼鼎錯列
讀書、接客悉皆粹然、曰、是吾小物廬也。
即爲余作小物廬三字、且微記有定、同曰、不
知何義、我余應之曰、非小物之廬、實精廬之

小也春城夙為大隈矣知愚昧其幕下三十年
能知侯之大而非小也今言大而取小者蓋
有深意存焉已獲古印數百顆韓約素小
印尤可珍儲磁杯幾十事皆小而無大者乃言
酒趣不在難飲近者聚袖珍本小不盈寸大亦
不過三寸自任史諸子至小說雜家莫不盡備
收之中箱置于枕席間乃用小字冠於簾蓋
標其所好也客曰僕聞大魚小之語未嘗小
蓋大異哉春城之所好也余曰春城之言小
也非謂小大相並也春城之一巾箱已藏袖珍
二千餘種尚馭中有餘地更藏萬種亦未
可知也前人有言瀛世界於一粟佛法何其

大貯乾地枕一在道法何其云春城之中
箱近之矣然仙釋之言不足道也余嘗
聞之小者大之精也春城其有得于此乎
大隈度每事規其大而不能小其所不能者
春城冥贊默禱不遺餘力侯倚重之春
城所以為小精可見其一隅矣抑春城棄志
負國好讀書竊有所希圖則為今日之小精
者一變為他日之大精者其亦將有見之乎客
喜曰唯之乃次以為記只愧吾文之獨不精
已

此記又余公手面と語りしもの 茲村の記と重複す
五峯 書すす下の扁額とせし二層中に存すし唯

根山
五卷を煇しと揮毫一巻を世とてししことを
九月十一日記

〇閑に乗し下谷里の時の文行書を訪ねて二三の圖を
得

九月十一日録

一 三味線獨行古

三冊

此書天保十三年、紀州の人高濃采次中
思温(邦東洲)著す所なり、巻首
敷更に海り三徳の圖し、彩色を施す
梓の谷所に、思温の題し、思温を
便り、引しある用意あり、思温とい
ぬりし所の、思温を北りたるが此書、
特徴ある名著とせざるを得ずか

十二行

とるものあり、三徳の図のなるとは、思温の
も斯く、思温の全部に語をつけたり、思温
を和とす、吾仍の史の一資料とす、思温
也

一 物出ぬきり勢

写本

一冊

此は何人の著きしを知らざる、思温の
物とす、そのうち、思温の文や、思温
の考証あり、思温の自伝の詩歌を、思温
すん、思温の著ることを、思温の
書い、思温と少なき、思温、思温と、思温の
二人の年、思温の別、思温の、思温の
ことと、思温とす、思温の、思温の未刊本

あえ

一本河津清原

一冊

清原の自筆をみる。愛すべきの結句切
の人物花弁のあふる所を眺むる心
を綴りて冊子とす。多量の歌
歌を各紙一首の記の字を故味
ある情なる二枚を巻く。此の巻と綴り
の故白を汚したるやある

一合義解

新編抄巻四巻十冊

次日此書を得、此の第巻に關するも
一七欲を引、唯此の古、高松抄をのり
本に印記あり、且つ下巻と校訂あり

十二行

括弧に記すものは、字を考へてすべし。尤せ
信本に據り、朱をかくは、そのも自家の
元に出るは、そのも、凡の此書を獲
んふいと、挿入のといふ

○新刊出處士の南唐唐記を眺るも、翻後し四分
の一程後、こしに中、一二臭味を感し、此ことかある
東文の長いから、約一七左なる者きつく

慶長十一年六月、考林道春が、其才信澄と
共、自欲抄と曰付し、其の如く、耶蘇合巻
不干を記し、抄理と教理とを同じ、問答
を記す、其の結果、排耶録を著し、其
の文三三、羅山文集に収め、ある、其の文ハ

今日の松平傳傳のまゝいふてあるが、南時の大需首
春が耶蘇教志と議論を戦はしたといふ不
興味があつた、尚ほ彼は若くはといふ、何人
あるかと釋ぬると、まゝいふ、何人といふ
文の上大なる貢獻にして松平貞徳ひあるこ
とがまゝいふ、貞徳、清くは耶蘇教をせし
むといふ、無つたが、耶蘇教なる不干
ハ交りかあつた所から、彼はしつとあつた
さへ又不干といふ人であるかと比つぬと思ふ
まゝが、松平傳傳の序に、あるフカニ、破提宇士
の心も不干といふ、北人の心も、世人の若くは

又問卷三冊あり、まゝの神佛を排して耶蘇教
の教理を説いたまゝの、道春が不干といふ、
前一年の心があるから、或は南人の心を出を
示さんといふ、知んぬ、此者、大正六年伊勢
神宮の文庫から、ある見よ、此は、上巻が
終つてゐる、まゝいふ、本巻の誤りも
あつた、まゝいふ、卷尾に不干、南巴鼻、尾と
してゐる、まゝいふ、相島の言、河のちつた傳は、後
に、復し、此の破提宇士の心があるといふ
不干と道春の對論、いふ、まゝいふ、あつた
道春二十四才不干、四十四才と云ふ、年輩が
南書、廣記、まゝいふ、激論があつた、此は、記

てんておろ、不干が詞窮すと禪理を説き
應殺しとともある、兎三角此三人か三巴と
つて耶蘇教今母堂に口角味をたへしに
ことの合つれのみ、味のあることある、貞徳
ハ耶蘇教をこそ奉せざん可き、灰散ひあ
つれことハ、其の録しに、内々南堂の
物に從て言及し、又ハコが大ぬおひるの
の北をを懸ししと、あかあうくさうと云ふ
ことである。

○次の伊蘇保物語がある、日本は外西文の文と
九に西矢と北者もある、天書改む流字に附さん
羅典語から譯さんとのある、他の耶蘇教の教義、

すゝゝの、おれまさん、北物語にけの教育上必要
と生々残り、後々或時右出れが、又浮の前のと異る内
容も出入がある、違つてある、此の日本版の
流字本もあるといふ人がある、まを
高いのを傳入の萬流版がある、この流字に就ては
くの流がある、或は富本三流に、あううと云ふ
ハ、耶蘇教を改むの流、元年井上流後守に、
江にの切支丹を、西直かんうく、
と、の流、以後の流、と記し、
鳥丸光房の著も云え、
が、岡古におも、
る、山崎美成の、

人といふべきか比のかの、七絵古と桂川氏いへり最上氏
流る此者重考を待せし始らうと云ふ事、そのやん
ごとする人といふ誰か、鳥丸見廣説曰こゝにあり
から又おつころも思ひ、往年離る三國の書出し
伊勢係の圖巻出しことあると、因つて者林が此圖を根
本として此の比のむのあるまいかとの説もあるが、終
問ひある支那の此抄巻を譯し比の文禄より下るこ
と三十二年の天啓五年、寛永二年永年である、古名を況義と
まてある、譯あるの末に於ける支那最初の者ある
二人は、漢名を金尼閣字を四表といふものか
といふ、釋此者禁し比の邦人の名をまゝと
まて来たる、今世果に存する、佛也といふ、今邦名

教の考と考は比かゝるであらう、但し禁人之前より比は我
邦にも舶載せん比とく古人へ見比むある、今う
此考は巴里のP.N.圖書館の字をまゝに傳付して
り、新村鳩吉の佛國と遊比折しごとく遊覧し比と
いふことある、漢文は佛り救救の多からざる、本
にありといや、金尼閣の譯名はニコラトゴと云
ひ其傳は南米廣記と云ふ、略とあるから、
略する、但しこゝに附記を要する一事は支那の西
附地は見え見えに景安碑、を元は最初の人
あるといふことある。

據りたるも、現に奥付に「前頭岩崎の
 ちやうの若を見る、震災前荒干の残
 本を補送せんと板木を某所にて托し
 又「田録」に四推し、原本カニ鳥有、帰し
 たりといふ、此書各巻末尾に名疏を附す
 白井光太郎、和名を考訂し大沢宏平
 其の名を考訂す、二八の現今見本の六
 家あり、尚索引二冊を添ふ、いんむ大
 切のものせん、之れを録し本方かゝる人
 本書の「田録」の粘具の傷ハる點に於て
 空前のよゝとるも、珍重し可らう、價
 二万三千圓也

○足利學校、今「釋典」を舊のこころに挙げたること、昔
 一の「釋書」の如何か、殊をよんで見世おの初、さう
 ておらば、かゝるい、其の校名をよびあるか、その昔、一
 校として、生徒を教へ、以て「ドンナ」のあつたか、こ
 んと知ること、ハ、其の味のあることである、日本、よゝ之れを徹
 すべき資料、ハ、之、いか、當時日本に、海来して、おれ、布
 教、何、本、國、の、通、信、し、た、書、の、間、や、報、を、さ、す、の、に、繼、す
 こと、胸、の、其、の、振、子、を、さ、す、の、に、此、の、後、ハ、外、人、の、改、程
 買、冠、と、ん、て、お、れ、を、思、ふ、を、隆、盛、と、し、て、本、を、報、
 かん、て、お、る、の、に、生徒、が、三、千、あ、る、と、か、此、の、校、丈、が、総
 合、大、學、と、あ、る、と、か、此、の、の、校、の、勢、力、ハ、驚、し、本、
 あり、向、と、あ、る、と、か、お、れ、の、事、の、困、難、を、區、分、す

待せらる。坂東の山にう遠にわ方々あるを以て宜敷の地は
實に佳くても可くも。又彼地は米穀蔬菜粒の欠乏を
かへきこの殆ど絶無なるが故に、彼等公物の欠乏を
思はざる可くも。余惟れに自耳人友日耳曼人の真
氣を憐れん身体の艱難に馴るること多し。彼等も
泣きをんこと絶えし。坂東の大なる四方の改の
徒雲集すかくて其徒多の御心と悔つるやおのが子
に等むを以て御人に懐くも。余の安く不と由に
坂東に大都會ありし人の無強し。その臣民は血統
く武勇剛きを以て名あり。而も從温和の性情を現
あらざるを得とわや。希くは有徳福徳の法友を地地に
送らざるに配望あることを

日本に渡来せん者ともが法大寺に到る。行々の困難
に遭遇すまきことを概論せんか、彼等のまきりまの
と多量の労働論議を断えず攻めかけらる。此
民衆の愚弄をまきりて冬人の嘲笑を被らるる事
ことを心白する可く、彼等の思索冥想の皇
も福撒を速める暇裕たるを以て殊に坂東と
都といはれり。聖者の日課を以て福するの寸暇
すらも得がたかりし
九州のあつて遠く坂東の地を想像し、此の比から氣
候や食料も思ひにきりあつた譯もある。係し
是利其の校の振力力に如何と彼等日と路列に映
し、此の各取するを先人の心ある、その實は此頃ハ

のり少部文子君に大正八年一月書り文子君に
雑居の中より綴り文子君に少部、中二部、
三部、桂、の綴り文子君に少部、中二部、
右に少部君に少部、中二部、
三ツ仁、少部、中二部、

新編文子君

中二部の綴り文子君

大正八年一月十二日

の里山の才六高等学校の教授の志田君といふ人
ハ未だの仁心あるか、此頃中四民報紙にて余の随筆
山陽を三日にて論評をかくに因縁か、一節を
し、以て謝した所か、昨夜此人を細書を書き来て、
まんごうと此人ハ才六高等の才六の、今、才六後六
高、才六、才六、才六、才六、才六、才六、才六、
陽の若者、才六、才六、才六、才六、才六、才六、
才六、才六、才六、才六、才六、才六、才六、才六、
成、才六、才六、才六、才六、才六、才六、才六、
し、才六、才六、才六、才六、才六、才六、才六、才六、
し、才六、才六、才六、才六、才六、才六、才六、才六、
年史を編む者とする、才六、才六、才六、才六、才六、

此等建築の内圖書部ハ希大典也を紀念する爲の
余前年其工費の募集に没頭し四十萬圓許の
応募を得而自時早く着手すべしとありし事、其等
学院建設其他未だ附帯一急を要する事あり
りも後れと今日ありたる也此工事の成るハ余
：一日千秋の思あり余時初めを内部を一説し
中心愉快を禁し得ざるし、既に事務所を新
館に移し、此今圖書を移すべしとあり、此館の工事
ハ他の増設すべし設計あり、其の今なるは
書庫ハ六十番冊を容る規模あり、現在の
圖書部二十七番冊を容る、充實すべしとあり
の年所を述べし、閲覧室ハ従前より十人を容る

の規模ありしが、今ハ三層階人を容るべし、地下室
あり、此の規程を見、さるべきことあり、
し、あつて又、運動場とあり、運動場
こいつら、講堂設けんとする、又、大
通路の設けんとする、こゝハ從來、校側
理科のラボラトリの設けんとする、
校の敷地内に収め、代り此道をつまき、
二十年前を計画し、実現せんことを
運動場と設けんとする、スタジアムは、
ハル板を以て、十層を、心り、
高さの仰ぎ、よく、痛快の感、
ろく、是、運動場、も、今、
狭隘を感ず、此

ニドの設備の僅くは狭隘を補ふべし。運動場の
 地積は五千坪(さき)を以て、野球場のグラウンドを以
 て、狭隘を以て、況んやあつたか。おかしき
 将来に之れ四五倍の地積を必要とするに論ずる。数
 年前も運動場を移すに難んたる事ありしに、
 一と現在のグラウンドを将来に用ひべき地積の
 地を充つべしとの議あり、余尤も之れを主張す。幸
 西武鐵道株式會社の電車線敷設の事ありしに、
 今此の某地に之の敷設を許可せん事を以て、其の
 電車線の敷設を以て、圓の中心に其の中心の
 の内ニ某地を以て早大の運動場と無償で貸與す。附
 するの申出あり、早大も亦他の運動場を移轉す

必要ありし故を以て之れを納むる事あり、此等の作
 業中の敷設とす。此等の附を以て、地積
 及び他の電車線敷設の事あり、三十分間として、速し得
 るといふ、是も早大将来の為の視すべしとす

九月十日の記

西武鐵道株式會社、早大初早大の會社に、ハモ、
 のグラウンドを運出の附する事ありしに、
 萬坪ある事あり、将来の運動場として、
 圓に充つべしとす、二萬五千坪を以て、
 是を以て、今此の地を以て、
 大隈會社の某地の用地二百五十坪を他の同
 會社の用地に、代りて、

けりしことあり、らんを将来或る地踏も地下
線を敷き、出場を大隈宮前の一併に求めんと
する計画も、出たが請求する、乃ち地下線
敷設の曉より、こゝに停車場を設計人とする也
他の運動場の為の事、此れあるの、犠牲
ハジメを得ずとして維持費も七折成を
志し、今、實ハ一尋けたる運動場、地を
減る布設の認可あるを、乃ち控へ、改に一坪
十坪の價ありと云ふ、左を八改に二萬五千坪
と二十萬坪の價あり、計り、将来これを
運動場と使用せらるゝ、少くとも二十萬坪
の價を要する也、他、大隈宮前の大隈宮前

こへもいふ、あること、格を定む、但、比、織、道、早
稲田(早稲田)の日の、少くとも六七十年の後、
あるべし、是れ、現在の運動場を、度々
可く、併し、全る、ま、寄附の場を、合
使用せりとあり、今、此、案、附の、甲、雙、子、
と、昔、此、地、に、入、り、ま、二、村、地、を、お、お、中、し、設、備、を、
不、施、し、時、ま、此、の、地、所、に、遊、戯、を、試、み、
今、此、に、遊、戯、を、示、す、こ、と、を、得、し、
今、此、と、早、大、の、契、約、者、を、見、る、に、此、に、
ハ、漢、然、の、感、あり、他、の、或、り、地、を、
を生、す、こ、と、を、得、し、余、の、地、を、
を、次、つ、て、維、持、の、席、上、に、控、え、此、に、

を造りしときなり。此の字の別を多しけり地に行かぬ
今の電車より高田の馬場迄到らざる可らず
併し先んこしりて其支店の有するグラウンドに
二時方を費す。此すんハ時分を拾て四分の一
過ぎず便利ハ四日の論ありあらず

揮毫

○余大正八年十月以降日々購ふ回書
數と代價の購入の月日を録し購書
其高多し二行界紙本一冊約百
大正八年十月より起り十一年六月末
同し高多界紙本約百枚と
起り十四年九月の末に若干紙書

十二行

の購入代價を附載す。此中未だ未だ八年
十月以前のものは別々花什記あり記録の体同
しかこす冊子の形状も異也回書と書書
董錯綜す。此中未だ三冊を心り大正十四年九
月以降の購書之歴とあり余ハ性疎慢日帯の家
用の如き之を録すを決せし而していと回
書日の價を録す。由意す。好む所を偏し
一旦海へるもの自れ増習とす。故の及、七年
繼續のこと今度する。能て三冊を
心る所以也。先次初めて代價の心る。一冊
回書買入價格八千三百七十九圓五十五銭
九百六十四圓(五月迄)其後九月迄の分約二千四

此書為春國三人撰と云う三十六の古代名を考
証す、是れ梓校書等の夜を考へ別と撰者の
ありを附す、すべし、道又云う、撰者の何人か、未
詳と見え、疑ふ所あり、金名、物、人、を
と疑ふ、試み、木崎の系を、史を、関、ま、
此方引用し、ある、木崎、未、此、方、を、知、し、
へ、さ、う、字、を、五、冊、の、頃、年、珠、を、の、心、を、持、
一、と、其、の、字、に、あ、る、ま、り、北、若、者、の、先、人、亦
金、名、家、と、云、と、見、し、く、は、さ、大、人、の、説、と、引
く、不、あ、り、其、の、先、人、に、上、毛、比、行、あ、る、ま、り、木
比、其、人、を、考、へ、得、す

此の某書此の在致、日光山本木回巻といふ字をとりて

七冊本の書本、全部、回、の、あ、り、巻、首、に、石、崎、灌、園、の、私、文
の、序、あ、り、え、ん、に、依、り、と、灌、園、自、り、日、光、山、の、書、三、行、
を、其、集、し、と、回、と、あ、り、日、光、山、の、書、山、本、の、書、
ある、書、に、あ、る、ま、り、特、種、の、回、巻、が、あ、り、澤、比、知
と、す、地、の、山、本、の、全、部、灌、園、の、本、の、回、巻、に、収、め
あ、る、也、未、比、を、調、べ、る、に、違、か、ら、ぬ、唯、此、の、特、種
の、右、回、巻、の、あ、る、こ、と、を、記、し、お、く、ま、
○楠、瀬、日、年、未、功、雜、談、の、内、山、陽、の、説、を、考、
證、す、大、坂、此、の、説、と、い、ふ、ま、り、言、田、と、い、ふ
不、あ、り、こ、の、緒、方、と、い、ふ、家、家、あ、り、緒、方、洪、庵
七、北、家、に、生、る、と、い、ふ、本、末、有、家、何、れ、の、人、と、い、ふ、を、知、ら
ず、と、い、ふ、書、に、あ、る、ま、り、此、の、説、の、起、り、に、因、縁、を、考、

おつこちが出来てわねいからいやるさう
又ちと貴人多し抱へてしとゆへんあつとせ
三膳の飯を二せんは仕あふとせ
ごぜんくと福あはらさ

○全ハ粘塵前ト真崎ハ蘇村ニ記あり後ハ段口

十二行

五十年の記あり其稿余其の揮毫を求めて装して
一卷とす之を齋中ニ置久しとす而して二人共
記成ると作ハ折ク二記ハ二友の遺稿に存すと長
七を齋中ニ之れを缺く能はず今日偶ニ閑ヲと得
て二記を寄して成ル字松と長ハ子孫ニ傳ハべ
しハ装ハ一ハ巻トとるハんニことヲ期ス大正十
四年九月十日ハ粘塵前定ニ就シ議ス
○浅草や根岸がその昔ハ海産ニありシことハ隠ル女
子ノ事ヲ不レ謂フ浅草海苔ハ其ノ實ニ浅草ノ海ニ
採ルんノ心ヲ多ク入ルと陸地ニ多クありシ今ハ大森ニ
海苔ヲ採ルんノことハ多クなり根岸ノ海ニ採ルんノ海ニ
てありシことハ定説トとるハぬが、ハ河利ノ儀ハ三昧ト

いふ能くを免るる元金杉といふ根岸の一部に字見
 家といふ不あることをいふ、元海中にありしことを証す
 ことと見えし、元々遠く蟻壳を品川より比地
 に運び、胡粉を物取し
 といふ、恐らく誤り
 べく、貝塚は他より運び
 たる貝の豆坊をいふ
 たる、其處に堆積し
 たる、おかしに北花あり
 え、亦浅草に多くの貝
 殻をも見し、これを元金
 杉の又塚の貝を元金

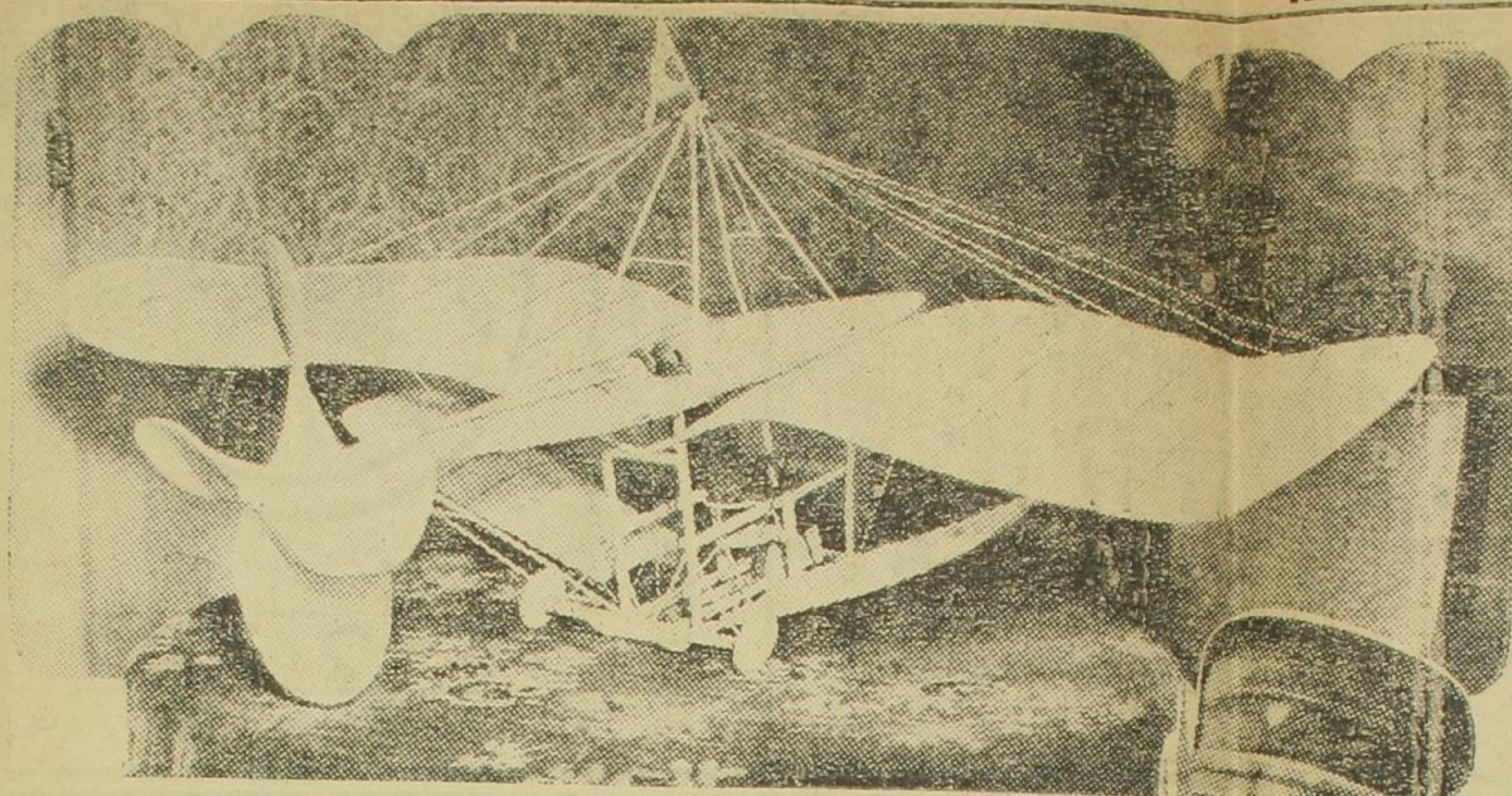
元金杉百三十七番地より百五十番地に至る一帯の地
 を小名貝塚と稱す、往昔此邊より上下尾久村三河島村
 に亘り胡粉を製するもの多く芝品川邊の海岸より其材
 料たる蟻殻を運搬し來り堆積十數町に連り、遠く之を
 望めば小山に雪の積れるが如くなりし、然るに享保以
 前より漸次その業衰微し遂に蟻殻は馬に負せ淺草邊に
 運びて棄てたりとぞ。後ち其地に復た胡粉を焼くもの
 出來たるも幾もなく衰滅せり、明治十八九年の頃淺草
 公園取擴げの時六區大池の邊より夥しき蟻殻を掘出し
 たるを見たり、即ち曾て此邊より運び棄てたるものな
 りと云ふ。一説に、本村の北、三河島村邊往古は入海
 なりし由、十餘町の蟻殻山は、自然此邊の土中より得
 しものとも云ふ、何れか是なるを知らず。貝塚の地今
 に至りて尙大雨などの後には地面に貝殻白く露出し土
 色を見ざるに至ることありとぞ。
(因云蘭學の開祖前野良澤
 北村に在り)

リとすす也、如くあるべき、決りありし地、元々貝の
 あり、若也、胡粉の物取也、貝のありし故、自然に
 行ひたるを、外より運びて來つてあるべし、と見えし
 九月十八日記

○早大の新築者、庫、圓方を各日移轉しつゝ、
 すが、若干の板木が出て來た、其來歴を問ふれば、
 があるか、記帳があるか、と先へた、皆る自分、関
 係のあるもの計りがある、但し板木の種とすまふ、
 とも、あるが、宋版を薩摩で、雪隠、刻し、板木が
 全部揃つてゐる、元と池に、瑞々、琳瑯、圓、寺、
 あり、宋時代の、其、夫、か、持て、移し、貫つて來る、
 云、あ、から、餘り、出、る、と、宋本の、西、後、刻、ひ、
 あり、と、見えし、

：別とせしよむある。沙翁祭の時式十枚か摺
つて同様に領つたことかあつたが、後、板したこ
ともうの、記帳に存する。此位あるものがある。北の序
重さどの版木、或る時代に、サラにあらつたよ、だが、そ
れ、壽七様を、おれを、買ひ、か、つた、と、今、板を
聊う遺成と考へる。以上の如き、その、年を、経ると
来歴が全然分らなう、偶々、人、河元
此のを、扱として、書きつけおくと、九月十日
○余、遺記を、抄して、南、や、置、名、と、五、山、峯、山、跡
村、心、の、所、の、二、記、を、録、し、り、思、へ、余、の、書、齋、齋、律
日、辨、ち、曰、く、雙、魚、堂、曰、く、不、律、庵、前、者、の、余、か、多、く
古今の尺牘を、藏し、り、時、余、の、書、と、こ、ろ、後、者、の、

各種の筆を、蒐め、り、時、命、す、所、多、く、前、雙、魚
堂、の、終、り、記、す、不、律、庵、又、菊、池、晚、香、の、不、律
庵、説、を、世、の、今、蒐、集、の、筆、を、久、し、と、采、り、此、文、亦
他の二、度、記、し、り、録、す、一、き、歎、吾、経、歴、を、語、る、の
外、吾、か、性、格、に、言、及、す、る、もの、あ、ん、心、也、不、律、の、筆、の
別、稱、する、こと、敢、て、説、く、を、要、せ、り、余、の、筆、の、托、し、と、不
律、の、二、字、を、採、り、よ、め、高、中、禮、法、に、律、に、せ、り、余、の
少、處、近、退、自、由、し、て、吾、好、む、所、に、從、ひ、他、の、筆、人、に、律
せ、り、た、る、目、録、す、也、余、苦、心、集、ち、る、所、の、筆、一、空、す、と
虽、し、不、律、の、言、は、尚、ほ、あ、る、即、ち、此、説、を、小、抄、一、度
記、の、次、に、録、し、終、り、想、ふ、余、書、齋、の、文、を、撰、ぶ
よ、め、の、三、友、皆、易、筆、す、余、亦、と、共、に、今、尚、ほ、存



世界最初の飛行機と 發明者二宮氏 (日清戦争出征中の撮影)

根爪林皆視るべく書きしるしく和具と終る
おふ、これと海にたのむ家か以て新
海林ちりかを見して廿二何年
なると道楽、龍家の名を一冊に
収められよと
知れぬ、此の風



十二行

世界最初の飛行機は 日本人の手で作られた

日清戦争中完全に發明したが 相手にされずに笑殺された

○二宮忠八翁を通信省が表彰

通信省では外國でも今日のやうな飛行機が考案されないうちに飛行機を考案した大坂市東區御所町三の二九二宮忠八(八)氏を表彰して航空獎勵勲章(一等)を授け、同氏は小さい時から麻の籠型を考案して十四五の時には麻の籠型を賣るやうな位、大坂中區船場町の伊藤十羽の鳥が兵士の殘飯を食ふべく谷間をとんでゐるのを見て航空機飛行の原理について考へるやうになり日清戦争中自分の考案した現時の飛行機と異ならざる飛行機の設計を完成した、そのころ航空のとは世間で相手にされず折角の設計も試飛する事が出来なかつた、氏はその後軍務を退き目下大坂製菓會社の社長で伊藤八幡酒の生れである。

外國の研究に 先だつと數年

ライト兄弟等の 實驗も十數年後

在につき波多野航空局長は曰く 明治廿二年から廿七年頃はまだ俄に外國は勿論外國の例に見ても 空中を滑走し得べき機械に關する

笑殺の主は 長岡外史將軍

資力の缺乏が完成への道 を塞いだ。と云語る

「京都愛」表露された二宮忠八氏を京都府下八幡の寓居に訪ふあからんだ直前の翁は六十とも思へぬ氣さである、部屋には卅五等もがら人間が自由に空を飛ぶと出ればと空想してをった、海濱に出たある日澤山の鳥が殘飯を食さつてゐるのを見たとつばさが仰

異彩： を放つ「私は小さい時から風をあげるのが好きで 明治廿九年九月第十二聯隊に入隊し

羽を： ひろげたま、空

ハアこれだと感じて玉虫を大きくしたやうな飛行機を作りそれに船で使ふやうな形體のスクリーンを尾につけ自動車のパネルを踏む仕掛けでそのスクリーンを動かすやうにした明治廿四年四月九聯隊兵隊でその試験をやつた時は非常な好成績だつたが助力に行き詰りそれ以後は原動力の發明に没頭した時には空気が抗を試験するために傘をさして體の上から飛び降りた事もあつた、玉虫と飛魚型の二ツが出来たが

資力： がないので研究出来ずそのうち英國でライトが飛んだと聞いてわが意を得たやうな氣もしたがしてやられた口惜しさ

の教神があるからである。亦代社の列敷地を以て選ぶるも時代の
ある茶物も時代の切れを用ひ、外四を海舟の爲
物と外四を列敷の地を用ひ、此に九七の茶物
の折合を保つ爲の心ある。包拵の陰に取外す
よあるも、包拵のすく茶席に出すよあるも、包装
か茶器に光彩を添くよあるから、非常の吟
味を要する事なるも、代衣か鍍賣の二ツの的とな
つてある。茶人が別殿地を得るも、精力を盡すれども
謂んばなきもあらず、茶人の世界は支那の宋代の
御物かいろく玩んだ、身御物の支那本ぶ、稀
観のよあるも、拍のぬち、日集する譯に此等
の御物が日本に存在し、えんか包拵を用ひ、えんといふ

盤、異に値することもある。勿論斯の時代切れを得ること
と、容易なるも、扱ひたす時代と支那に於いて、高僧の
急沙衣、えんが支那の御物なる故を以て、えんかつぶ
えん包拵を用とす、聖徳太子の蒲團地が支
那物であるからといふえんを代衣地を用ひるとする
ことと、こととを、但し急沙衣もえん包拵とす、
の貴物もえん、寶物をいうてあるものもあるから、天
船も船なることと、出来ぬ譯に、えんなることを、
し得る地位の人か、しることある、貴い切んとする
断片を得ることと、容易なるから、随つて小さる
代衣を心するも巧み、縫ひ合はせることと、やうに、同一切
の無い時に、他の切れを縫ひ合はせることも、やうに、ある

いよハ何んといふも寺院に存するから、切今も寺院に春
播の園縁因関係がある、茶をえ自身も寺から生んじ
よ、此れから、自然の縁因ひもあるの、高僧の袈裟衣
や寺院に存する几帳其他儀物の類が、茶人が多く
を手に本は品定めを、此れも中、よのひある、乃ち此の切
凡ハ夢窓圓師の袈裟切と時代も後方も模倣も
日同一ひあるか、夢窓切九と呼ぶも、此れもふといふ
換ふことか、洋山もある、寺院の物品が多くの場合標
準と考へてゐる、又日當時文も不便の世の中、日印度
や土耳古女等の珠重の織物も不便の世の中、日印度
く船載せんとせんが、茶人、珠重せんじ、例へば
間道といふ、切九ハ土耳古のよ、此れと云はれゐる、回

之織(カウロ)も土耳古のよのひある、河内國木綿の
この名が示すこと、阿茶院朱をひある、此等いろく
の切も七多、時代が異つてゐる、昔とて古の、
稀れひある、此れも、文珠重せんじ、極古流り古
流り、中流り、後流り、此れ等の、如階があ
る、また、如階、さう、價、中、ま、の、等、級、も、定、ま、る、の、ひ
あるが、た、さ、い、か、ら、日、稀、貴、と、し、て、尊、ぶ、の、ひ、い、ら、る、
え、流、り、た、さ、い、の、ひ、い、優、秀、の、品、位、が、あ、る、か、ら、も、七、多、茶
人の眼の、此れも、日、痛、い、た、さ、い、を、異、階、を、さ、う、七、校、局
さう七優の、此れ所があつて、裂、ん、地、の、鑑、別、と、選、擇、
い、ら、る、と、考、へ、ら、る、へ、き、流、力、が、あ、る、に、乃、ち、日、切、ん、地、
此、れ、け、る、伯、樂、の、茶、人、い、考、も、人、が、無、言、談、に、香、葉

しとある切ん地の内から取り上げて珠と一とある
少くとも、亦趣味の上から取上げたいものも多々ある
が、某寺を奉仕する御朱印切と唱ふる支那の純
子のときも、支那の天子の誥命書に御印玉が押
さんである、その印のあり所を代名地：用いしは、
趣味の上から取上げたい一例である、全体茶の何と
何まも趣味のこの切、器物、**史的**の趣味もある、
同じく、**史的**の切、**史的**の趣味が階級としてある、
ハ茶人の思惑心支那の徳器を取り上げ、其形や
色やその他いろいろの家からおもしろ味を見出し、
自國の産地かと思ひつゝ、**所**の味をつけて、
之を趣味のこの切と一と一との切であるが、之んは、
本

こゝ

徳

袋の切ん七時代、**儀**方から、**摸**倣日もある、**儀**
も趣味の：元々、器物、**風**流を添くたものである、
其の切んに命とある花を交へた丈で、**史的**の趣味
を感せようの、**儀**方から、**儀**方から、**儀**方から、
利休切んとする、**儀**方から、**儀**方から、**儀**方から、
袖の切んをいふ、**儀**方から、**儀**方から、**儀**方から、
ある、**儀**方から、**儀**方から、**儀**方から、**儀**方から、
寺切んと、**儀**方から、**儀**方から、**儀**方から、**儀**方から、
を基として、**儀**方から、**儀**方から、**儀**方から、**儀**方から、
縁因か、**儀**方から、**儀**方から、**儀**方から、**儀**方から、
趣味がある、**儀**方から、**儀**方から、**儀**方から、**儀**方から、
の趣味がある、**儀**方から、**儀**方から、**儀**方から、**儀**方から、

去ると輪素に成る。其輪素を裁ち切つて経糸
 の毛を主とせしむるものあり。其輪素を裁ち切
 り針金を扱ひたのよを輪素天と云ふ
 丁列布 和装束のテレイプから出たものあり
 ふう。 紋天衣言紙に類し一種の毛織物
 である
 若羅絹 和装束地方から載のよの改機
 似た一種の絹織物あり。其表面に標文の
 ありんたものあり。モリソの大小に依り大
 木目小木目の絹がある
 軍皮加 船乗品をいへ何の四産か
 らぬ木綿の次ぎ織物で文柄はさまりあり

臥亞

印度の地名ゴアから出た名。和装
 人の手より伝へる我邦に輸入せられた一種の織物
 である

吳羅

毒しく吳羅服連と呼ぶべき
 である。もと和装束のグロス、グレイン

(粗き) 駝毛布の意) から轉化しての物あり
 本来駝駝の毛に織り上げられ、一種の堅く
 地の織り物あり。支那に「是れを牛郎絹
 と稱し」と伝へ、我邦より江戸時代の末より男
 子の羽織として用ひた

右外四織物の名今も各産地の茶
 葉の見方にも物出

足下之蓬累而行。不任吐之書空耳。甚哉鬼蜮之魔於人乎。所
 枉唐體一章。情至語至。氣格皆至。後聯草堂小記也。鶴泉雖未
 穩乎。明影已沈矣。鼻魚之淚。不待未結。既已潛々下哉。至天薄
 酒不澆老阮胸。磊塊萬奇。幻出人間未曾有之山。以附我白屋。
 則對之爽然神遊于玉清于蓬閣。昔人有以酒見圍邯鄲者。
 不意不映微邑之薄酒。使我脫魔軍三匝之圍。飄於天地之間。
 謝。詠史歌行。及冒黎奇句。亦傾大手筆。披覽無措。嗟息玉趾
 殆二十日。而僅三把酒。蓄約之約不果。玉蘭一碗。苦茗。終
 為遠別離。畢生之憾。曷有已已乎。日醉中之談。及史述。高明緒
 言。有甚卓犖者。今日攀二事。重待直言。盛什允當。高韻耐未

意。今不唯小巫見大巫。氣彈以斲之。史事故。自抑言必如伯儂丈
 人。勿咎不敬。五侯弟四日。士人行不務多。必審所行。雖不能備
 百善之美。必有執意。終身刻苦。欲為孔門一士人。是僕也已。浪
 華徐崎代之子。僕嘗一因而見。其眼中有神。稜之逼人。別未十
 年。於心未能忘也。願足下使僕尋舊盟於千里外。幸甚。僕欲質
 正敝者以弘固陋。息口諸外。梅雨歇。熱甚。南於不時。待秋風
 於於瓊浦。何如。不具。

史電擊。誠如所論。竊案范史昆陵之軍。陳史赤壁之戰。比
 馬史鉅鹿之師。撲靡不同。新而論之。有吾師七百乘。鞞。鞞。鞞。
 鞞。望之如荼。如火。如墨。西馬隻輪無返者。晉歟之走者。舟中

之指可掬矣。昔古史奇艷。徒未如是。子長直徑猶日韓王勃
 然作氣。攘臂膜目。按劍仰天。大息頗似。煩絮王氣。死結而不
 揚。涕滿匡而橫流。全似賦語。則竹山亦似可怨。何如。通語喝
 采。亦如所論。昔徠翁論六朝而還。言涉俚常者。如宋史不耐
 煩。梁書透水。喝采何別。與昔書寧整兩齋。所用不同。以後史
 氏例類之。履軒亦似可怨。何如。中井二子。有燐其筆。彼二書
 者。必不如水府史草之也。辭之撲靡。在其書體。而文章
 之介兩位地。似不可以是概為。故著劭史漢以下者。亦頗受
 史之形容語。有能合我邦集者。如日號令一施。士平壁豐旗
 幟。精明皆變。日春燕歸巢於林木。亦頗劭類。大史公雖質
 左氏以上。至於虞夏。斧藻之辭。一機軸也。東京之靡。雖西京
 亦非又之至者也。僕於陳范諸書。陳甚。足下保於歷史。顧印兩
 端。而語僕。無有靳秘為。

星

子成賴時傑

容楊下

五月三十日

道井堂

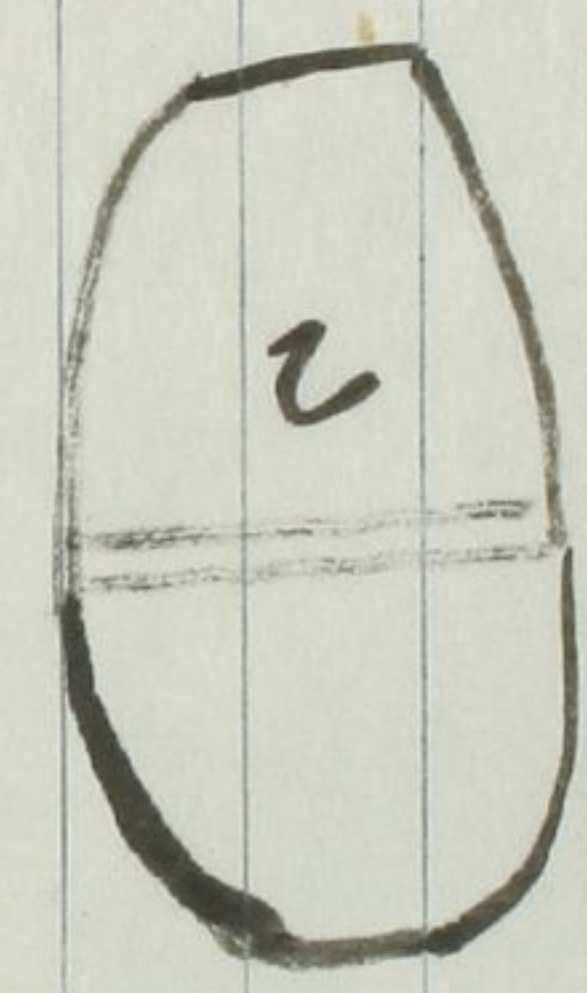
頓首

○茶器に鏡を附すことハ城遠物から如才のしと
云いんておる、多く和歌らゆから鏡をまはさるゝの比が、
わが和歌の和歌に拘泥するをきく、茶物の姿や其の趣を
とらうつけはよも少くも、茶器と云ふも茶碗茶入
茶杓おいろくある、鏡のつけ方をまのちがあるが
客の伺懐に包み蓄かあつて、無邪氣の日本茶を
び人の感傷を換ふるは、鏡を撫ふが肝要と云う
ておる、中まに留鏡るに類するものもあるが、
ぬゆちをぬぐふ、女、古人が茶入の口、
のび辨舌と鏡しり、と切り即ち茶入の尻から
出来て走つておるといふ、
襦袢の鏡を附し、
襦袢の上からの鏡があるが、
十二行

茶器の鏡ハ一行あるの文ハある、
○金襴ハ倭衣ハ支那より之れを錦と云ふ、
金襴といふ、
日本から支那へ、
地ハ金襴衣と稱つたといふことハ、
リ、
とハ、
縁を取つた加刺波衣を襦袢と稱し、
切んが、
来支那ハ、
横に、

あふまゝうゑ敷に應用せんとから木扁を衣扁に改
めたりといふといふ也軒のたつひあり

○茶人の包装の行儀にてあることか也茶を既と云
ふはが、こゝに又挽き家と名つけばそのかある茶入
を納めつゝも茶である。一種の形であるけいも、こゝに茶
入の形に出来てある木を挽いて造つては肩付
の茶入を入るゝと文珠の如き丸茶盤を入るゝと
聊の形が異なるのである。前者は甲のこゝに合口が上頭
まついてある。後
者の乙の如く合
口のせまらうて
ある。之れは茶



入を納めるといふ代を懸けて入るゝ勿論である。尚挽家
の上りも代をうけては相入るゝ。極下字のこゝに
るゝと。挽家を他の挽家に入ることもある。斯
く二重の挽家を用ひる所あるゝ外部の大きき
合を以て外家と名つけしてある。所謂茶と云ふ
は肩付の挽家から轉して出来たりある。又中
次丸茶盤の挽家も轉して出来たりある。何れも
茶茶と懸す。場合、用ひるのを法則としてある。
○茶入といふゝの瑕がある。其志てかき出来てあ
る。僅うな些斑のあるを茶人が惜んじ、取上げて
用ひ、其んが鏡をひのたのふと却りて珍重せ入る
例が少くもゝるゝ。茶人が名つけしにマと名づく

しよの指痕が誤まりて靴の上の印してある瑕を云ふの
ごあふが遠妙に其のヒマを流して其の若く五月雨
と余に比、是れは古歌の「星一ツ見つけたる夜の煙し
き」の月日もまた五月雨の定とあるに因つて衣付
けによむのである。此の外茶人の瑕を云ふ通語「ア
（袖か火に解け損ふことと云ふ）カケ（袖の爛けに
こと）ヘゲ（袖のへげの痕をいふ）トゲツギ（糸を
此の時、室中へ茶又は湯が密着してこきを瑕底
の出来るといふ）すて此等のキツも茶人の見込
いろいろの之風を取上げたものもある。

○茶器の石物と云ふは、起つては刀剣に石物と
云ふ稱がある。倣つては、わらうと云ふも、也軒の洗ひ

さふ、是れがいつから初まり、此分んが、或は是利時代から
であるか、東山義政の相河酒造、河田等、に因つて
其の二名、花岩も品勝して等級をつけ、其の優劣を
いふも大花物といふ。是れは後世の大花物と呼んでお
る。亦、堀遠州が品定として名物を生んで、こん
を中興名物と云ふのである。東山名物、其は斯界の
オリーソリテーにあるから、其の定め、此よが後世の氣
とあるは、謂はれんまゝあるが、一概に物泥するもの
陋である。此等、新名物の見漏らし、よあひ優劣
の物があつた名物として、差支るもの、是れである。
○茶器の大花物と云ふもの多くは、支那や高麗のもの
である。是れいろいろの来歴があつて、治がつけたある

茶号に限らず骨董美を理解し得る人はあ
らから此に誇るに足らぬ。先と角茶産地に於て
不と重んじたるのよが茶道の以て重んじたるのハ一
奇とよまへべき。然る者か之を見ゆべき。たゞは
定めし驚くことあり。此等茶入の古といふ
ハ宋元も漸くよかあるが、一切心算か如くぬど
んる地方に出来此七のかといふこと。たゞぬと字
もぬる評である。但し藤四郎といふ名が支那
に研究し出さし教へつれと云ふから、およその
見南がつかぬむさうさ。今も也軒は、
支那の南方九江の産であるといふのであるが、
論推量である。此等の茶物の味、
十二行

一此のハ次丸茶かある。此影印書にありうと云ふ
のハ左七と云うと思はる。九月十日

○随筆 鞍山陽の漢者か多頻々と書状かくるや！
往々参考とする。や材料とする。ことありて、
い、今日も保本堂男(大政市西成区玉出町三
二)といふ人から郵者が届いた。知る人かある。此
八田村村中の茶種とありて、大政市にある倉田
血所産の味田茶。山陽と味田産法の圖と
送り受けし所持して、抗るといふ。余の隨筆に
此の事かありて、多えを喜んでは、此圖に
ての感念を告いでくん。傍に附帯して、
ある。いふべきは、此の圖を木崎ぬる

から受へる巻頭、ぬめれいと思つたが、午ま入くるの
 つら、倉田より外へ轉つたから、木崎も宮を求めた
 ぬめれいと思つた、左様な御札から見ると、この二感の
 述べ候も、い、そこは、返るを、あ、こ、定りて、是れ
 考を、承せと、送つた、同、候子、候つて、八、堂
 候の節、巻首、進か、た、い、と、思、つ、た、
 九月廿四日
 の江戸の、あ、あ、あ、あ、代、に、札、差、か、豪、奮、を、極、め、程、々、の
 及、来、と、や、つ、中、に、一、人、回、考、道、来、を、や、り、江、戸、第、一
 の、花、古、家、と、云、い、ん、だ、よ、う、あ、る、こ、と、ハ、や、へ、て、も、お、れ、が
 其、人、の、名、を、お、ん、だ、ま、し、て、其、人、の、淺、歷、の、紙、を、お、ろ、う、
 此、が、俳、三、昧、に、左、の、記、を、か、あ、つ、て、詳、細、と、お、ん、だ、

江戸第一の藏書家守郵抱儀

舟野源五郎



足代弘訓の「伊勢の家苞」に
 江戸にて第一書物の多きは聖堂也、次に淺草藏前守
 村次郎兵衛也、和漢の藏書十萬卷あり、號を十萬卷樓
 と云ふ、次阿州侯也、和漢の御藏書六七萬卷ありと
 いふ、次瑠氏也、藏書皇朝の書物計六萬卷計あり盡
 く好書にて無益の雜書無し、次朽木兵庫御藏本三萬
 餘卷あり、次古賀洞庵先生藏本一萬餘卷あり、號を萬
 卷樓といふ、此外小山田將曹も夥しき藏書家也、狩
 谷粹齋は藏本に富たる上に珍書を蓄たる事他に比類
 なしといへり。
 とある、此の聖堂に次ぎ、蜂須賀家の阿波國文庫、西
 久保江戸見阪四千七百七十石の朽木文庫、瑠保己一の
 和學講談所、古賀煜、高田與清、狩谷望之諸賢よりも
 五車の富に於て勝れてゐた守村氏とは即俳人眞實庵抱
 儀の事である。

足代弘訓と云ふのは伊勢外宮の神官、近代での和學
 者であつた、憤る所あつて、江戸に出たのが天保元年、
 弘訓四十七歳の時である、四十八歳は滞在し、四十九
 歳天保三年に伊勢へ歸つた、將軍家へ直訴狀を出した
 と云ふ噂もある、伊勢の神官共が門地に驕り世襲に安
 んし、大神宮の御蔭に馴れて、碌な事をして居なかつ
 たので、眞面目な弘訓でさへ妾を蓄へてゐた、あらう、然し
 其眞面目な弘訓でさへ妾を蓄へてゐた、當時の世態の
 墮落してゐた事はこれでもわかる。
 了阿上人の吟稿天保二年の條に
 伊勢愚者は皆神かるをしらすして江戸の御寺にかゝ
 りける哉 網代權太夫寓居一院
 とある、網代は足代の音便で權太夫は弘訓の通稱であ
 る、此の狂歌は白子黨の歌のもぢりて、何んだか冷笑
 の氣味がある、其癖弘訓は、了阿上人を檜山坦齋、北

静慮と與に隠れたる江戸の三大學者也と推賞してゐる、そうして丁阿上人が當時の目錄學者をそしりて「何もかも皆みたふりを四庫全書閣藏知律群書一覽」と詠んだ歌を擧げてゐる。北静慮は名を慎言字を有和號を梅園通稱を屋根屋三左衛門と云ひ新橋の金剛屋舖に住んでゐた、派手な事がすきで狂名を網の破損針金と云つた。坦齋は名を義慎と云ひ深川六間堀に住し書畫の鑑定などをしてゐた、諸官補任といふ著述を檢齋も大に推賞してゐたと云ふ、丁阿上人は村田張のさせるやの隠居で字を春山號を一枝堂臺麓といひ天臺學者である。弘訓が天保二年に江戸の某寺院に寓居してゐたことは分る。この「伊勢の家苞」には同名異本が色々ある、家藏本は埜の温故堂舊藏本で勿論寫本である。こゝに擧げた諸藏書家の本も大方散逸して、阿波國文庫を始め小山田文庫求古樓本など坊間に散見するが、獨り抱儀の舊藏本は管見に入らぬ、抱儀が藏書印を用ひなかつたのか、或は大火にでも焼失してしまつたのか、其爲めに抱儀の藏書家たる事を知る人が少ない、唯天保三年刊の書畫蒼粹に「家に十萬卷の書を藏むる事あまねく人の知る所なり」とある計りである。大正十二年十二月刊新選俳諧年表文久二年の條に抱儀歿、正月十六日、享年五十八、淺草永住町龍福

寺に葬る、守村氏、名約、稱次郎兵衛、眞實庵、不知齋、小青軒、補陀落山房、初め鷗嶼と號す、淺草藏前の札差、蒼虬門、江戸人、書を抱一、詩を佛庵に學び、詩書畫點茶香花を能し、天保二十四詩家と稱せらる。とある、そこで明治三十四年の古い方の俳諧年表を參考すると、文久二年壬戌の下に抱儀歿、正月十六日、享年五十八、淺草永住町龍福寺に葬る、守村氏、名は約、通稱次郎兵衛、鷗嶼庵、眞實庵、不知齋、小青軒、補陀落山房の號あり、蒼虬門、江戸の人。とある、鷗嶼庵は鷗嶼庵の誤字であらう、龍福寺も龍福院の誤字であらう、誤字の儘受繼いだ新選年表は丁寧過ぎる、加之佛庵が詩を抱儀に教へたと云ふ事は疑はしい、佛庵と云ふ人は他人に教授する程詩が出来たかどうかと思はれる。此の年表に天保五年抱儀蒼虬を招いて厩橋に居らせたとあるから、或は師事した事もあるのかも知れぬが、文政十二年六月立机の摺物を見た事がある 其れには

何丸

抱儀 號小青軒

鶯溪 小青軒妹芙蓉女史即座宗匠准公府祇候女房
桃磯 號清可軒即座宗匠

とあつたから、人名辭書の源菟乙由希因蘭更何丸抱儀とある系圖も誤りでは無いと思ふ。鶯溪は一に莫愁庵とある、桃磯は天保七年の俳諧人名録に綠菴園桃磯、東都御藏前森村次郎助號長茶子として

人の居ぬ家まであけて春の風
朝客を濟まして暑き坐敷かな
車井の音ひゞきけりあきの風
ゆく舟の逆に棹さす時雨かな

とある、同じ年の廣益諸家人名録には守村喜三郎桃磯名梨字鮮夫一號長茶子とある、俳諧年表には鈴木氏とある、龍福院の墓地には抱儀の墓と並んで長濱氏累世之家塋とある墓石に桃磯の法號が見えてゐた、本姓鈴木で守村氏に養はれたか、本姓守村で鈴木氏へゆき、又長濱氏を嗣いだか、一向分らぬ。

天保二年足代弘訓が江戸滞在中已に十萬卷の書を擁してゐた、抱儀の年は僅に二十七歳である、天保三年刊書畫蒼粹初篇には

書名約字抱儀號鷗嶼 淺草御藏前 守村善太郎
江戸の人書は佛庵翁の門畫は抱一上人にまなんで一風あり又蕉門の俳諧に名あり其外茶道聞香活花の技

あり家に十萬の書を藏むる事あまねく人の知る處なり
萬點星毬照水紅、納涼舟泛水光中、東吳將士今安在、想見當年破敵功、兩國難誅鷗嶼守郎約、
とある、初名善太郎か、此頃は俳句よりは漢詩の方が得意であつたか、刀水君藏短冊中に
閑居、不嚼梅花三斗蕊、誰知鳥瘦與郊寒、詩成懶向人間售、一炷清香獨自看、鷗嶼
とあるのを見た、此れも同じ時代のものか。天保七年の俳諧人名録には

鷗嶼巷抱儀、東都御藏前守郎次郎兵衛、名約、字希曾、又補陀落山房、又小青軒、三教九流無不通、品竹調絲無不解
ひやつくや人静まりて後のはな
まうけして涼もせぬや草の門
ゆふりあもてさひしや今朝の秋
初冬や刈田のへりのかきつはた
とある、品竹調絲が怪しくひゞく、此の書の序文は抱儀が漢文で書いてゐる、それには鷗嶼閑人守郎約識として抱儀といふ印を用ひてゐる、又此の書に柳廼屋伸々女として抱儀の妻君が擧げてゐる、
柳廼屋伸々、東都御藏前守村氏抱儀妻、

灯も月もたのみにせぬや春の霽
戸を立ぬはかりもすし草の門
見定たところもなく今朝の秋
夜の紙衣音もせぬまて着馴けり
とある、此句は却て富者の相を缺いてゐる、伸々或は
貧家の出か、同じ年の廣益諸家人名録を見ると、
詩書、鷗嶼、名約字抱義、一號經解、又松篁交翠山
房、淺草藏前旅籠町守郵次郎兵衛とある、俳句より
は詩書が本領であつたと見える、大梅と其軌を同ふし
てゐる、天保七年は抱儀は三十二歳である、十年後の
弘化三年の跋ある俳諧人名録二編を見ると、
鷗嶼社抱儀、東都御藏前守郵次郎兵衛、名約、字希
曾、稱風流萬戶侯、
遊んだとおもへば長しはなの中
家ありとくれてこそ知れ夏木立
その上え雨も降りあきのくれ
明るかと船へりなてる霜夜かな
とある、句に衰兆が見える、抱儀四十二の厄年である、
萬延元即安政七年の文雅人名録を見ると、もう藏前に
は居らぬ、詩書でもなかつた。
畫俳、淺草朝鮮長家、眞實庵抱儀、名約號鷗嶼、
とあり、又

俳、淺草朝鮮長家、守村永年、號靜々處、抱義男、
とある、これは抱儀の歿する三年前五十五の時である、
この時も號鷗嶼と見えて居れば新選年表の初め鷗嶼と
號すといふ事は如何あらうか、恐くは抱儀は俳號が盡
號であつて鷗嶼は詩書の時に用ひた號ではなからう
か、初め抱儀後に抱義と署したが短冊にも此の兩様が
ある、其書は、抱一風に狩野風が加はつて居るかに見
える、元來武士といふものは其の祖先は功名をしたか
も知れぬが——其功名といふものを正しく考へて見れ
ば亦無意義かも知れぬ——其の爲めに無力の子孫が徒
食をしてゐる、徒食をして居る結果、尙無力になる、
そこで實權は家老とか用人とか使用人に移つてしま
ふ、札差などに旨い汁を吸はれるのもつまり、武士徒
食の弊である、併し其札差も子孫になれば同じ結果に
墮る。又人間も金が出来ると名が欲しうなる、高慢氣
が出て色々な事に手を出す、香花茶の湯、詩歌俳諧な
どは無難の方である、或國では博士論文の代作もある
さうです。詩歌の代作などは朝飯前でせう、金に
飽かして本を集めると、本人には會ひ度い事は無いが、
本が見たいので學者が出入する、何んと己れも學者に
交際が廣からうと喜んで御座る。昔し或國に殿様があ
つて本を蒐めて文庫を建て、あつたれば貴族中の名物と

なつたが、もと／＼殿様の事だから、妾にしても直さ
にあさる、近來は一向熱がさめた、熱がさめると本位
費用のかゝるものはないと云ふので持てあましてゐる
矢先へ、餘の化物が不動様に化けて、明德を明かにした
ので、幸ひ文庫をアヒルに脊負せてナント名案か／＼
と云つたと物の本に見えてゐるとか聞いた。だから抱
儀にしても十萬卷の書物が眞に自己の物になつてゐな
いから、書物が散じ自己が死んでしまへば何も残らぬ、
自己の物にならぬなら、せめて瑠璃の様に叢書にして
天下の物にでもすればとにかく、澁井寒泉老の話では、
抱儀も最後は零落して文久二年正月十六日に三間町の
裏屋で五十八で死んだ、さすがにそれでも病中に高蔭
繪の枕をしてゐたさうである。悴の永年が眞實庵を繼
ぎ、明治になつて深川の小築庵春湖と肩を比したが、
此れは明治二十一年六月二十二日に五十で死んだと聞
いた。兎に角抱儀一家が後に傳はつたのは俳諧の徳で
ある、試に大正七年三月永住町の龍福院を訪へば、本
堂の前、向つて右に、一構を爲し、見上るばかりの立
派な石塔が建つてゐた、掉石は六角で正面に森野氏歴
世之墳墓と漢隸で記し左右に法名がある、それに並ん
だ一基は掉石も圓形で少し低く是れには長濱氏累世之
家塋と眞書でかいてある、桃磯夫妻の法號は此の方に

あつた。
眞實庵隆年抱義法子
楊柳院晴光伸々大姉
靜々處看雲永年居士
觀喜院秋山妙照大姉
宜春院格壽桃磯居士
圓通院不染貞蓮大姉
今度の地震であの古い石塔はどうなつたか、建てた
ものは倒れる、興つたものは必ず亡びる、興つたのが
目出度いのも、亡びたのが不祥でも何ンでもない、
榮枯興亡は、社會に於ける時の進みである、理想郷に
到る進歩の段階に外ならぬ、枯野も風致があり、花の
山も情趣がある、積める富が如何に社會へ貢獻したか、
失つての貧しさが如何に修養に資せたか、富貴に處し
て富貴を行ひ、貧賤に處して貧賤を行ひ、一擧手に處し
足、眞實庵の眞實に俳三昧を得たかどうか、抱儀に對
する問題であり、僕と諸君との問題で無くてはならぬ。
(大正十三年甲子一月二十五日夜稿了)

誰が春の夢路通ふぞ伽羅枕
小座頭の梅嶺ざけらし細廊下
桃咲くや山村水廓春深し
桃咲くや山村水廓春深し
粟炊く翁錦繡なくとも桃
破顔微笑桃一葩や僧の袖
九

守村抱儀の事

瀬田唐橋

俳三昧第二卷第三號舟野氏が抱儀の事を記されたが、五山堂詩話補遺第四卷十九丁にも同人の事が見えてゐるから、申上る、「近代藏書家、吾猶見るに及ぶ者、兼葭必端の如き類、家道昔に非ず、書多く散佚す、今日鴻富を以て名を得る者、獨り守村鷗嶼あり、其書十萬卷、眞に邑中の文不識なり、鷗嶼名は約、字は希

曾、一の字は抱儀、書畫俱に逸、詩も亦清淡、初夏幽居に云、

家向綠陰深處住、有時尋句到池塘、紫藤架畔掩藜杖、紅藥欄邊倚竹床、隔葉鶯啼春尙有、着花客絕日初長、幽居却是多公事、起拭梧桐坐炷香、

新正試筆に云、

我有丹青筆一枝、今朝試手答雍熙、新圖不寫閑花草、臨得澗池五瑞碑、

佛庵小梅の隱居に題して云、

松門花徑無人問、野水村橋有路通、只言三尺書窓小、坐受平田萬頃風、

鷗嶼妹あり、名は鶯卿、字は春葩、海棠庵と號す、才藝殊絶、畫梅に云、

懶把金針繡鳳凰、且將水墨誰孤芳、指頭曾染薔薇露、只恐燕支澆淡粧、

遊金澤に云、

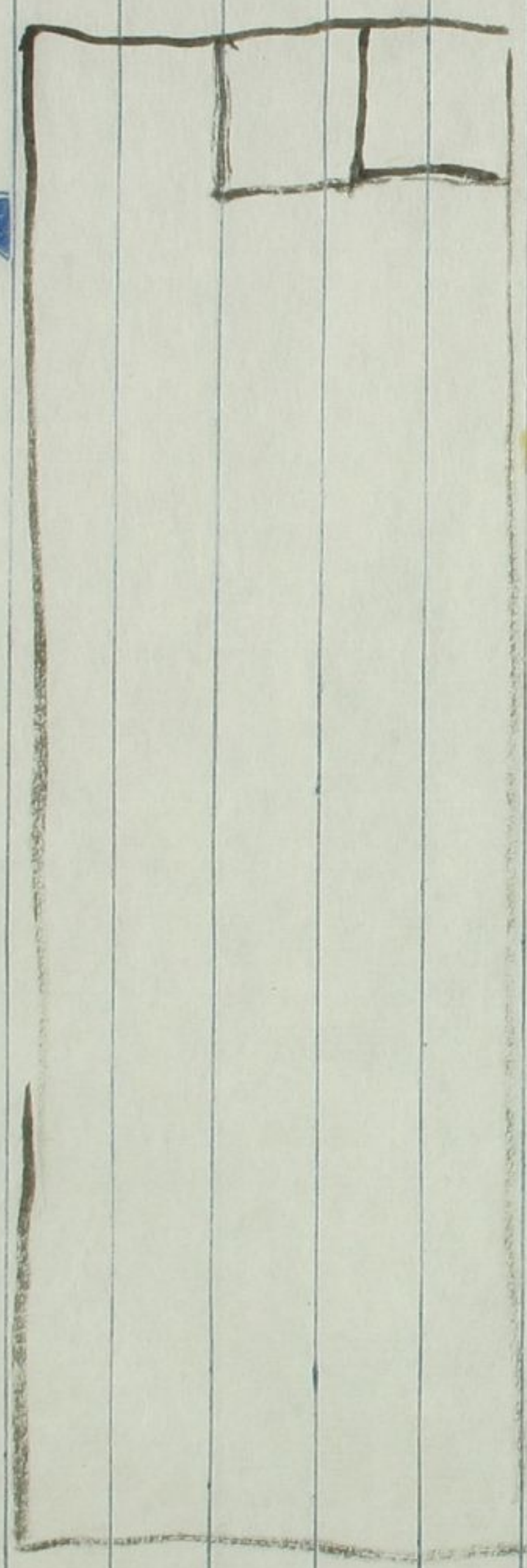
夏淺勝春好時節、弓鞋趁伴弄烟霞、傍山沿水閑遊遍、不用蘇家油壁車、

油壁車は西湖佳話に見ゆ」とある。鶯卿は即鶯溪の事と云ひ詩をも試みたことが分つた。

○色紙、短冊と此と和歌をかく用紙と限らぬ詩を書いとう画をかくいとうする事もあるが、寧ろ変則と見做さるゝ事あり、此の二ツの事あり、和歌の社令等に專用されて、其の大ききせ、ち必らずしも一定しておらず、中形もあんなに極り、形のものもある、その抱儀の論の殊業別々の和歌の料としておさげし、文柄かつえてゐるから、えんこを日本の工風は和歌を書く必要から考へておさるゝものやうに思はんか、其のいふ所、其の畫の上郡の一隅に色紙形の彩色も、此所があるて、是れに漢が書かんとある、こんが則

ち色紙である、此時代の何れも支那を模倣し
 此時代の支那の佛畫の漢に斯る形式がある
 とし、その例を以て倣つた、思ふに、此の色
 紙形の名を書き所を、支那の引首と云ふてある。
 我々の寛平二年中の巨勢の金目か書し、此聖
 賢の障子の漢を以て色紙に書かんとあり、即
 ち支那の所謂引首である、格古要論に趙子
 昂の言を載せ、古人畫に題す、引首に書
 くとあり、宋の徽宗帝の著に成る、題字も亦
 引首に書かんとあり、宣和殿の表装せんとし、
 畫の上部に多く黄色の絹の引首が貼つて
 ある、此が元の末から、漢に傳へて、直に画の者か

九に地を書きやうとあり、日本に後世に到る
 ま、キ作の條も、此に上部の色紙あり、色紙
 形の引首のあるのを見、殊しく、此の、
 るい形式の倣つた、此の、
 へ、その色を異なり、此の、
 貼る代り、
 此の、
 此の、



漁の比が一向に珍書に見あらずらうに、唯はあつらふ
目：觸れたる字本が亡友山竹新大の譯和三冊
七巻と又三巻とありて、紛らふべきもの
●人の著るもの、北方の凱陣と四巻巻がある
と、英人セー・ハミルトン、フイアの *The Triumph of*
Adventure + Discovery を譯し、三冊の
傳し、おもしろい、こんと他人より及取、田村傳の
いともあるが、自分より何となく懐く感も
らんらう、亡友の比、山竹と獨学の
窮措大、勤勉馬学の人があつたか、一生不遇
に終つた、自分の出生時代、自ら余が親
族能く、方々身を定めておれ、あつた可くあり、
晩

年より柳崎：室の内、久寛の世説、さう日見の及
譯：從予して終つた、尚ほ他に一東の書、その好を得
た、まゝの印人濱村花六(解)の文、稿二十枚、枚外、詩
稿が一冊あつた、花六の文をよみて、おもしろい、文
稿の内、重要な稿、朱を入れたもの多く、亀谷行
の字入をよみて、ものがある、他人の文章を改下ると書い
たものも若干あり、此の印人、日見人と云ふ
ものが、極め上手か、此の何れも、何れも美事
のものもある、これ他人の文章を、得ることのむ
いから、紛れを惜み、婚ひ入んた
○此の木崎、安吉か、友人佐伯仲花(望洋)を
伴ひ、来つた、まの山陽漢を交へ、望洋八漢文

を善くするが、支へておられる余の隨者山陽を撰
んじ一序を乞はれと、善好を示さん、お前又その
よく出来たおれ、身が定符の上送るといふから、
を取らうと、たか、文意の山陽は、
めを得てゐるが、山陽を流殺するその春成先生
の此の隨者、山陽雲あゝ、何をか云んといふ、
思接であつた、為山陽のこと、
ハ前日廣瀬淡窓の後裔廣瀬宗大の、
まう、其の家、花の多く、
が雲集と、
を、
か、
十二行

善好を、示すと、
去の大、
近の、
ま、
の、
お、
い、
陽、
中、
思、
進、

他のを幼きことありしとあり 九月廿七日記
 ○薩摩の地は七つ妻と云ふ城山の一曲を西郷の如
 じを許し比海舟の心があること、隠んちういかに
 の世の由来はいまの世に似たりと云ふ此の
 例證は、仇三昧と云ふ此の心あること、
 詳細を知り得ぬ海舟も、此の心あること、
 こと、此の心あること、西郷の幕を、現に西南の役、西郷の
 心あること、捕雷と云ふこと、此の心あること、
 此の心あること、海舟の心あること、此の心あること、
 七洋山あること、此の心あること、此の心あること、
 の一と云ふこと、海舟の心あること、此の心あること、
 侍りしかるにぬ 九月廿七日記



薩摩琵琶名曲「城山」の創作成りし來歴

仇三昧
 不載

閑雲子

做勝海舟翁は今の東京人士、殊に明治以前江戸に産
 れた人々には忘れんとし、大恩人であるこ
 とを懐ふ。夫は慶應四年（此年九月八日明治と改元）
 三月十四日彼の芝田町の薩摩邸に於ける勝安房と西郷
 吉之助との會見である、實に江戸人士が手に汗を握る
 此瞬間の談判は東都百萬の市民が生死の分岐であつた
 のである。然るに勝安房の義膽赤誠と、西郷吉之助の
 慧眼寛量とは互に武士道の眞髓を發揮し、胸宇一點の
 暗翳を止めず、肝膽相照し、暗黙の裡に忽ち折衝成
 りて、全市が焦土の厄を免かれたのである。此間の消
 息に就ては諸家の説もあり、當時裏面に複雑なる外國
 關係の介在せるものありて是が刺激に依り一層その解
 決を速かならしめたのは事實であるとは云へ、兩雄無
 くれば此解決が斯く神速に運んだか如何かを疑はれる
 のである。是に依て之を見れば勝公は實に徳川幕府最

後の一人者にして維新革命の大舞臺を背負ひ、此大手
 腕を揮はれたのであると言はねばならぬ。その勝公が
 曩年薩摩琵琶の大家西幸吉先生の爲に『城山』の歌詞
 を作られ、西氏の手に依つて曲譜を完成された迄の事
 歴を茲に掲ぐるのは吾儕が勝公の恩義を忘れぬ爲のか
 たみ草とも懐ふからである。
 此事を掲ぐるに先だちて薩摩琵琶の大家西幸吉先生
 の事を述べねばならぬ先生は、元來薩摩の産で西郷翁
 に私淑せられた人である、明治十年の役の際には未だ
 血氣の若殿原であつた、此の役には西郷翁の下に西軍
 の一人として各處に轉戦したが、城山當時は西郷の陣
 所より約四丁程隔たりたる南照院谷（現今は招魂場と
 呼ぶ）と云ふ處の岩窟に立て籠つて居つた、夫が爲め翁
 の最後を知らざる間に此方面の一隊は拂曉官軍の重圍
 に陥入り、如何んとも爲す能はずして捕へられ、惜から

ぬ生命を存らへねばならぬ事と成つた。後ち赦されて光風霽月に浴する身とはなつたが、氏は斷然意を決して風流の道に遊び、日頃嗜好せる琵琶を弾じて此上無き心の樂とせられしが、基より斯道に堪能なりし事とて、其技遂に神に入り、薩摩琵琶界に傑出せる大家と仰がるゝに至つた、然るに其事が端なくも、先帝の勅聞に達し、明治十四年五月に初めて袖が崎なる島津邸に於て御前彈奏の光榮を賜はるゝに至つた。その時故高崎正風子が詠せられた歌に

にしの海に沈み果へき四つの緒の

なかばの月をかゝげつるかな

とあつて先生が一代の面目を施されたのである。

西先生と閑雲子とは舊交の間柄である、一日先生の邸を訪ふて談偶々城山の曲の事に及び、先生は徐ろにその來歴を予に語られた、依て其談話をその儘左に録するのである。

(西幸吉先生談)

明治十六年の頃であつたか、高崎正風さんの邸に聘せられ、私の琵琶を勝公へもお聞かせしたいからとて同公を招かれた、公は早速來會された。勝公が私の琵琶を聞かれたあとで申さるゝには『西郷さんと吾輩とは古い知己であつた、西さんといふ方は今

城山に一所に居つたのでありますから、別して深くその事を感じます』勝公『それでは歌が出来ましたら高崎先生に見て貰ふてあなたの方へ送る様に致します』西『どうぞお願ひ致します。勝公『私は西郷さんとは實に云ふに言はれぬ深い交りを致したソ一云ふ因みを持つて居ります、實に西郷さんといふ方は日本に於て此上も無い忠義な方でございます。昔しかから忠義忠孝といふことを言ひますが、是を譬へて見たなら口の中から咽喉まで行つたか行かぬか位のものです、西郷さんの成された事は口から咽喉を通つて腹迄ズット派入つたのです。今日の世をごらん下さい、朝廷の御代どこから出來たのですか、この王政復古といふ有がたき御代を戴いたその初めである方です。私は朝に晩に寝ても起ても西郷さんの事は決して忘れません。これは私が常に思ふ處をあなたが城山に訖り迄お居でだといふ事ですから此心をお話し致します』と言はれた。夫から一年程経て、吉井友實公(宮内大輔)の邸にて再會せられた時、勝公曰く『今日は又西さんの琵琶を聞くことを得ました、丁度一年目の今日あなたとお遇ひするのは、私としては實に心苦しかつた。それは夙に城山の歌を作つて差上げねばならぬのを遅れましたがモ一暫

日初めてお會ひしたが、さき程初めてお目にかつた時は薩摩人見たいな人でナイと思はるゝ處があつたが、琵琶を膝にして撥を携へて歌ひ出された時の態度を見て、實に薩摩人の本色を現はされたと思ふた是を以て琵琶といふものは人の本心を現はすに實に好的のものであることを信じられた』此時傍に居られた高崎正風さんが『ソレハ勝さん先年 陛下が袖が崎の島津邸へ御臨幸の時、お聞かせられになつて以來、陛下は非常に是を愛でさせられ、忠孝を宣するは此琵琶といふ器の外は無いと迄御賛歎あらせられ、爾來度々御所の萩の御茶屋へ召させられて屢々西氏の琵琶を御聞せられになつたは、畏れ多くも有難き次第である』と申された。勝公がそれを聞かれて『薩摩人の十道が溢れて此の技を爲したのであるから之れが廣く世に行はるゝことになつたなら上の好ませ賜ふ處、下之に習ふと云へば一般の風俗改良は此器に依て成就すべし』と言はれた、勝公は再び言葉を変えて『私は西さんにお頼みがあります、私が城山といふ歌を作つてお贈りいたしますから、あなたの琵琶に合ふ様にして下さいませんか』といはれた』西『それは誠に有難ふございます、夫こそ願ふても無き幸ひと申す次第であります、私は訖り迄

らくお待ち下さいまし』と申された、その後、四五へん遇はれましたがヤハリ同様の事を言はれて遂に四年目に遇つたとき今度こそは屹度やりますからモ一少し待つて呉れとて夫から四日程経て高崎さんの處から手紙が届いて勝公からいつぞやの城山の歌が出来たといふて送られたので一讀した處が非常によく出來た、早速手を付て貰ひたい、出來たれば知らせて呉れとの事でして勝公にお聞かせしたいからと云ふ手紙をも添へてあつた、夫からすぐに手を付て一週間になつてもはや出來ましたと云ふ事を申送つた、高崎さんではそれは直ぐ勝公に告るから勝公が來ると云はれたら萬障差繰つて來會してくれと言ふて來たが、程なく明日勝公が見得るからとて、その翌晚五時頃から高崎邸に會し、六時頃晚餐が初まり夫を訖へて初めて城山の曲を彈奏したのであるそれは明治二十年の秋の頃をひであつたと思ふ。勝公は此彈奏を聞訖られて、『是は西さん御苦勞でした私は西郷さんの城山で泣くつもりでこしらへなかつたけれど、實に今晚は 郷さんの城山で西さんから眞實に泣きました』と言はれた。是が乃ち城山彈奏の初めてであります。近來の風潮では琵琶彈奏も非常に悪化するやうですから、私しが生存の内には

を蓄音機に入れて置けば、其本旨を失ふことも無かるべければとて、昨年初めて蓄音機に入れたのであります云々。

斯様な順序に依り、名家の美文と大家の名曲と相俟つて、この城山は創作され實に薩摩琵琶曲中の優秀逸絶の名品である。

『城山』の歌詞

夫達人は大観す、拔山蓋世の勇あるも、榮枯は夢か幻か、大隅山のかりくらに真如の月の影清く、無念無想を觀すらむ。何をいかるやいかり猪の俄かに激する數十騎、いさみに勇むはやり雄の、騎虎の勢一轍に、とまり難きぞ是非も無き。唯身ひとつを打捨て、若殿原に報ひなん、明治十とせの秋の末もろ手の軍うち破れ、討つうたれつやがて散る、霜の楓葉くれなるの、血しほにそめごかへりみぬ、薩摩たけ雄のをたけびに、うち散る玉は板屋うつ、霞たばしる如くにて、面を向けむ方ぞなき、こだまにひやく関の聲、もゝのいかづち一時に落るがごとき在様を、隆盛うち見てほくそ笑み、あないさましの人々や亥の年以來養ひし腕の力もためし見て、心に残ることなし。いざもろとも塵の世をのがれ出むは此ときと、唯一言をなむりて桐野、村田を始めと

し、むねとのともから諸共に烟と消しますら雄の心の内こそいさましかれ。官軍これを望み見て、きのふは陸軍大將とあふがれ、君の寵遇世の覺たぐひなかりし英雄も、けふはあへなく岩崎の山下露と消果て、うつればかはる世の中の、無常を深く感じつゝ、無量の思胸にみち、唯蕭然と隊伍を整へ目と目見合すばかりなり。をりしもあれや吹おろす城山松の夕嵐、岩間にむせぶ谷水の非情の色も何となく、悲鳴するかと聞きなされ、戎服の袖をぬらしそふら舞。

西幸吉氏の琵琶にて城山てふ曲を聞き感慨の餘りに

宗

城

四つの緒のねにかよひつゝ、城山のまつのあらしは世々に残らぬ

これは伊達宗城公が西氏を自邸に聘し、琵琶を聞かれしとき、公より西氏へ贈られしものである。

三澤 素竹

□夏を迎へて

百花枝を辭して新緑方に滴らんとす、清風楚々徐るに涼を送りて天地更に夏の來るを告ぐ、春往き夏來るも固と四時の序のみ、我に於て何があらん、「夏來ても只一葉のひとつ哉」と芭蕉の詠じけむ、實にや枝あるものは枝にたふれ、花あるものは花にたふる、いづれも一葉の安きを愛するこそ是れ隱逸の本志ならめと悟つて見ても夢なり、夢なれや夢なれや夢の浮橋いざ渡らばや

石菖に水打て我は酒酌む
人は夢ゆめや明石の明易き
時は今夕顔棚の天下かな

十二行



再び薩摩琵琶『城山』の 名文名曲に就て

附西郷隆盛翁城山最期の前日

閑 雲 子

本誌第貳卷第七號に「薩摩琵琶名曲『城山』の創作成りし來歴」と題し、勝海舟翁が斯道の大家西幸吉先生の爲めにその名文を作し與へられしを、西先生の手に依り曲譜成りし事歴を掲げし處、頃日一友人より、曩年民友社の編纂發行に係る『勝海舟』といふ一書を見しにその下篇海舟翁一夕話の中に

十年の役には、西郷は唯の一度も戰場に出た事は無いのだ、戦中に始終碁を圍んだり、或は山下利助に薩摩琵琶杯を弾じさせて消閑して居つたのだ、夫だから乃公は隆盛追慕の歌を山下が涙乍らの實話に由り、或は又た菊（西郷菊次郎君也）杯の實話や其他色々の實蹟に徴し、且乃公が知己の感を加へて「夫れ達人は大觀す」と云ふ薩摩琵琶歌が出来たのだ乃公は歌は知らないから、是が出来上つてから、歌の名人な高崎（正風翁）に見せて、直して貰つた處が、

高崎は彼の中へ「亥の年以來養ひし、腕の力も試めし見て」と一句を挿んだよ。是で立派なものに成つた。（廿九年九月）

とある、是に依つて見れば、その名文は勝翁が山下利助と云へるものゝ話に基き作られた事の様に見える併三味では西幸吉先生の爲にとある、何れか是なるや後の参資として教へを乞ふとの事であつた。閑雲子は既にその當時も述べた通り西幸吉先生とは年來の御懇意である。且づ該記事は親しく同先生より承つたのである。ばヨモ間違ひはない筈と思へど、兎も角麻布山元町の西先生の邸を訪ふてこのお話しに及むだ處、同先生から大要左の如きお説明を承つた。

山下利助なる者は、元來鹿兒島の町家産れであつた後年西氏の邸へも出入して頻りに西氏の氣嫌を取つて居つた、チョット器用な性質で琵琶も能く出来た

東京へ出て来て諸方の招聘に應じて現今の琵琶師の様に蒞席え臨むで彈奏を爲したので相應に蓄財もし國へ歸つて後ち歿した、夫は今よりやがて二十年程前であつた、同人は城山に居つた事もなし、涙乍らに云々などの事柄は更に合點行かす、兎に角才子肌の男であつたから何様云ふ方面からかゝる誤傳を生じたものであらうか

といはれた、是を開いて閑雲子も左もあるべき事と思ふた「勝海舟」は蘇峯先生のお名前も出て居る書故その編纂に疎かのあるべき筈はないが、資料選擇の際何かの過誤でがあるまいか、夫に南洲翁は基などは一向やられぬ、陣中で基を圍むで居られたなどは毫も據所ないことであり、殊に城山の曲中「亥の年以來養ひし腕の力を試めし見て」といふは高崎正風子が筆を加へしもの、如くあれど、その原稿は正しく翁の手蹟にて書かてある、高崎子の筆を入られたのは

「俄かにげきす數千騎」をとるの字を傍らに入れられしと

末章の原文

「戎服の袖もいかにぬれぬら舞」を「戎服の袖をぬらしそふら舞」

と改め

「城山松の夕嵐、岩間（いはき）にむせぶ云々とある（いはき）のきはまの誤りであつた假字一字の訂正のみであつて勝翁自筆のこの原稿は今も西先生の家に秘藏せられて在り閑雲子も拜見したのである。夫に「亥の年以來云々の文辭に就ては創作當時或向きに多少議論があつたさうなれど、勝翁と西郷翁とは維新當時よりの關係で互に同情の人であつたので明治十年今や薩南の風雪急を告げ西郷が道の正しきを究むと云ふ主趣の下に東上せんとしたりし時にも勝翁は思へらく此際直ちに反旗を翻へしたりと討伐軍を出さばなかくの事變となるべしとて大に憂慮せられた事もあつた、西郷を討つといふ文辭さへ如何と衷心に此事を深く憂ひて任られたれば、この詞章にも同情の進る所となり「亥の年以來の文辭も出するべし、亥の年以來とあるは、彼の征韓論にて南洲翁が袂を掃つて廟堂を去りしは明治六年にて同八乙亥の年以來私學校の生徒を養成せしといふよりなるべし。

西幸吉先生は十年の役薩軍方の一部將であられた南洲翁と親近の間柄なりしことは今更申す迄も無い、殊に人格高く武人に稀な優雅な性質で薩摩琵琶の名手として、明治大帝の寵遇を忝ふして以來今の琵琶師の

様に琵琶を賣技とせられず、超然として悠々閑日月に遊ばれて居らるゝのである。山下利助云々の如きは全然誤傳にして或は何か爲めにする處あるより出し説の遂に茲に至れるものか、幸ひ西先生の健在せらるゝに依り此事を承はると共に後の參資として再び茲に掲げその是非を明かに爲し併せて友人某の惑問に答ふるのである。

▽西郷翁城山最期の前日

南洲翁は世人の知る如く維新元勳者の一人である、十年の役無残にも城山の露と消えたは、心ある者の密かに惜しまぬは無かつたのである。今茲に是迄餘り世に傳はらなかつた當時の真相を窺ふべき事實談を紹介し史料の一助と爲さんとす。初め私學校の徒が西郷翁を擁立せしとは云へ、形勢漸く非にして翁が城山に籠られし時、部下のはやり雄は何れも決死の覚悟せしは勿論乍ら、心あるものは、自分等の生命は基より亡きものと思へど、翁に萬一の事ありては、實に日本國家の爲めに一大損失であればとて暗澹たる硝煙漲り陰雲天地を閉して、薩軍の運命も既に明日一日と迫つたるを知るや知らずや城山最期の前日、密かに薩軍を拔出して官軍方の首腦に面會を求めに來た二士がある、夫は薩軍の一將河野主一郎（後に大日本水産株式會社社長となり

しと覺ゆ）と野村忍助兩士である、當時官軍方の參軍は川村純義氏であつた、直ちに兩士を引いて面會された兩士の申出には「西郷翁は今日の結果に及びたれど翁に萬一の事ありては日本國家の大損失なればと、兩士は切にその心衷を語られた、川村さんは夫を聞いて「ヨク分りました、今此方から參つて西郷さん丈けを保護するといふ事は出来ませぬから御自身親しく出て來られたならどうとも其邊はヨキに取扱ふ事に致すべしと申された、夫より兩氏は川村參軍と別辭で官軍の陣所を立出んとせし時、參軍はこの二士を引止めて置いた、夫は兩人共此儘放さば此事を復命してその結果兩人は必ず陣歿するに相違なしと見抜きし爲め、セメテこの兩人は助け置きたしとの意なりしなりとぞ。然るに此二士の密かに拔出て官軍方へ赴きし事を他の者より聞かれし翁は莞爾として打笑ひ然のみ意にもかけざりし體なりしが、此回答を川村純義さんの許え爲すべき日時に至るも敢て返事を爲さんともせざりしにより遂に最後に終らるゝに及べるなりとぞ。

（以上西幸吉先生の直話に依る文實在記者）

五十本の 綴をすく綴つて
 来たもう一人フランスの小説家エ
 ミール・ゾラはうまれつきの氣む
 づかし家で自筆を送るのがきらひ
 であつた従つてゾラからその筆蹟
 を得ようとするには策略をくら
 さなければならなかつた、ある日
 一面識もない人から次ぎのやうな
 元帥 サンヌ



五十本の 綴をすく綴つて
 来たもう一人フランスの小説家エ
 ミール・ゾラはうまれつきの氣む
 づかし家で自筆を送るのがきらひ
 であつた従つてゾラからその筆蹟
 を得ようとするには策略をくら
 さなければならなかつた、ある日
 一面識もない人から次ぎのやうな
 元帥 サンヌ

認めた「好」は千萬添けないが
 私病氣だなどいふ新聞記者は
 大のうそつきです、私は完全達
 者です」この人の作敵は見事に効
 を奏した、それだまんとゾラの
 自筆が手にはいつたわけである。

はしばらくベリーにをりませんか
 ら自筆を差しあげるわけにはゆき
 ませぬ」この手紙をもらつただけ
 で婦人の目的は達せられたのであ
 る、しかし今までのことわり状の
 中で一番ふつた返答は、フラン

そのアルバムにタイプライター
 でしたよめた次ぎのやうな手紙を
 つけておくりかへした「奥さん、
 私は廿年来タイプライターで書く
 とにしてあります、御好意にかんが
 みて私はいふこんでまがひもない
 秘の自筆の見本をさし上げます」
 この見本はごくまづい一行であつ
 た、斯うした筆蹟が他日

どんな伎 に立つのだらう
 ?それは分からねが完全に署名し
 てある文章よりも金目が出るかも
 知れぬ、先日ドルーオー街の賣
 店でヒエール・ロテイの一ページ
 が五十ドル、エドモン・ロスタンの
 廿行の詩が一〇〇ドル、ゲーノー
 自筆の樂譜が一ページ五十ドルで
 あつた、けれども一番奇妙なのは
 貧窮に死んだテカダン詩人ヴェル
 レーヌの手紙の値段である、ヴェ
 ルレーヌは彼の著書編纂者に手紙
 を送つて自分は非常に困つてゐる
 から五十フランだけ前借したいと
 哀願した所、その手紙が讀んで九
 百フランに賣れたと(寫眞(上)フ
 オツシユ(下)ジョツフル兩元帥)

〇佐伯仲花より左の箱を定めて来る、此文余が
 志を得た、重版の折巻尾に加ふる可き、前
 日佐伯と今渡の節鴨屋母前と故心し階の
 こと并に其の年月(つぎ)決論す、佐伯ハ帰宅
 後取浦へて左の板書を又り来る併せしこいぬぬ
 宜く、一説に鴨屋の京ぬいゆくと万もき、傳記
 き、ゆるとえいど、是と年代も、随つて安政
 の忌諱をぬけるゆえ、志おし、たう、ぬらさ
 こともゆえ也、余も男ひ、運ひ、こととあう、かた
 此の枚料地のりゆえ、未定也、存す

九月十日記

「も昔も今」

「おそろしい」
佛國の揮毫熱

世界旅行でレコード破
リのジョツフル元帥

在パリ佛紙
マタン主筆
ローザンヌ

人の筆蹟を欲しがる熱は戦争以來格別ひどくなつて來た。マタン主筆は過去一年間に二萬枚以上も書いたがその半數以上はアメリカ人に與へたといつた。ところが、ジョツフル元帥も最近の世界旅行で五千萬をこえる寫眞やアルバムに揮毫した。前首相ボアンカレー氏はごく近ごろまで大の揮毫癖ひであつたが、今では揮毫をことわらうとする。却て時間の損をするといつてゐる。去年は秘書が一人付き切りになつて、毎日首相のことわり狀を丁寧に書きつづけたものだ、このおなじ秘書が

同じ時間 にボアンカレー氏の自筆を送つたらおそらくことわり狀の二倍乃至三倍も送れた

五十本の 纏をすぐ送つて來たもう一人フランスの小説家エミール・ゾラはうまれつき氣むづかし家で自筆を送るのがきらひであつた。従つてゾラからその筆蹟を得ようとするには筆蹟をのくらすなければならなかつた、ある日



認めた。嗜好は千萬添けないが私が病氣などいふ新聞記者は大のうそつきです、私は完全達者です。この人の作戦は見事に効を奏した、それだまんとゾラの自筆が手にはいつたわけである。

手紙がゾラのもとへ來た。先生足下、私は先生が病氣を癒したと知ると喜ぶ。先生は、先づ、先づ、先生を崇拜する一人として、効き目のたしかな良薬をおすよめしたいと思ひます、先生から一言の御返事下されば直ぐに在りかをお知らせします。ゾラは早速返事を

はそのアルバムにタイプライターでした。次ぎのやうな手紙をつけておくりかへした。奥さん、私は廿年來タイプライターで書くことにしてゐます、御好意にかんがみて私はいふまでまがひもない私の自筆の見本をさし上げます。この見本はごくまづい一行であつた、斯うした筆蹟が他日

スのマーク・トウエインといはれるトリスタン・ベルナルである。ベルナルは日ごろ手紙も、脚本も、新聞の記事もみんなタイプライターで書いてゐる、で、ある日彼は或婦人から肉筆で二三行書いてくれるやうにといふ駐文のアルバムを受けとつた、この皮肉屋

〇佐伯仲花より左の行を定めて集む、此文余が
志を得た、重版の折巻尾に加ふる可き、前
日佐伯と今波の節、鴨屋も折前と佐伯し際の
こと兼て其の年月、つぎに決論す、佐伯、帰宅
後取油へて左の板書を送り来る併せし、いふ板め
且、一説に鴨屋の案、いふく、と写さる、傳、就

○頼鴨屋北遊道筋の概略

ぼゆ生記

弘化三年丙午(二十二歳)江戸ヲ發シ筑波山ニ登

リ水戸ニ赴キ海道ヲ経テ仙臺ニ抵リ松島鹽

竈ニ遊ビ石巻南部ヲ経テ青森ヨリ函館ニ渡

リ幌泉ヨリ石狩ニ出テ小樽ヨリ江差ニ着シ

津軽秋田六郷横手湯澤庄内酒田村上新發田

新泻柏崎直江津糸魚川高岡金澤福井等ヲ漫遊

シテ

嘉永二年(己酉)十二月京都ニ歸ル時ニ二十五歳

嘉永三年(庚戌)正月藤井竹外ガ鴨屋ノ歸京セシコト

鴨屋ハ天保十四
 年(癸卯)十九歳
 江戸に遊学し
 如永二年(己酉)都
 賀リタルユヘニ
 年トナル

ヲ聞キ年賀旁、頼家ヲ訪ヒ、
 伴ニ沙河ノ旗亭ニ登リ左ノ二絶ヲ賦シテ竹
 外ニ似セリ

捲簾嵐翠落杯卮。山水与人皆舊知。

颺蕩孤斟異郷酒。七年風月在天涯。

三十六峰依舊青。与君詩酒闘崢嶸。

慚吾文字無奇氣。踏盡毛人萬里程。

安政五年戊午(三十四歳)ノ大獄ニテ江戸ニ拘送

セラレ同六年己未(三十五歳)ノ年斬ル處セラ

ル
 タ
 リ

大阪市西成區玉出町六百二十一番地

藤 本 定 男

電話 天下茶屋 五八番

Handwritten Japanese text, likely a letter or document, written in cursive style.

Handwritten Japanese text, continuing the document from the previous page.

Handwritten Japanese text, continuing the document.

Handwritten Japanese text, continuing the document.

Handwritten signature or mark.

大正十四年九月廿一日

市島謙吉様

大正14年9月 日

拜啓愈々御清適之段奉賀候陳者御 述之書籍賣上部數
對スル御原稿料下記ノ通り差出申候間御查收被成度候

書名	計算年月	賣上部數	定價	定價合計	印税	税合	印税合計
頼山陽	自14年3月至	31	250	8650	12		10416
"	自"年4月至	2643	250	740040	12		855048
藝苑一夕上	自"年"月至	107	230	24610	12		29522
" 下	自"年"月至	101	230	23230	12		27876
一言一行	自"年"月至	83	230	19090	12		22998
解三包	自"年"月至	76	200	15200	12		16824
	自"年"月至						99702
上記已付支拂金	自"年"月至						
大正十三年四月	自"年"月至						
" 十三年四月	自"年"月至						
" 十四年三月	自"年"月至						
前払金差引	自"年"月至						30000
	自"年"月至						69702
	自"年"月至						99702
合計							

頼山陽

前払差引額

現金付戻額

を左の通り報じ来る、他の著書と此に印税たるは
七日の二隻、北内山陽地業編纂会中に出版部
の支務三つ内あり右を控除して亦る九十七日二
隻は自清市、北表に揚ぐ、地業山陽の業高
あり多く、他は北地業のりるあり、勤きりるる
き、六月迄山陽の業、九部、二、六、七、七、七、
四部也、印税割合、二、分、とす、此の勤き
お、山陽地業、二、溪、係、あり、を、以、り、右、特、に、愛、に
ぬ、の、お、く、と、り、ふ

九月三十日

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二行

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--



